仙台市文化財調査報告書第106集

仙台市文化財分布調査報告書Ⅴ

仙台市指定文化財候補物件調査
旧仙台市長公舎解体に伴う実測調査

昭 和 62 年 3 月

仙 台 市 教 育 委 員 会

仙台市文化財調査報告書第106集

仙台市文化財分布調査報告書Ⅴ

仙台市指定文化財候補物件調査
旧仙台市長公舎解体に伴う実測調査

昭　和 62 年　3　月

仙　台　市　教　育　委　員　会

序

開府以来四百年近い時の流れを経た、私たちのまち仙台。絶え間のない都市化の波に洗われて、城下町として歩んできた歴史性やその名残りをとどめる風景などが、いま次々と失なわれつつあります。とりわけ、建造物については、遺跡などと並んで他の文化財に比べて保存の条件に厳しいものがあり、何とか維持していこうと努力されている所有者の方々の苦労には、並々ならぬものがあると言えるでしょう。

仙台市教育委員会では、こうした状況のもと、既に指定文化財となっている建造物等の保存・管理に努めて参りました。また、指定外の文化財の分布状況や個々の実態把握を進めるため、各種の調査を行ってきました。このうち、昭和59年度並びに同60年度においては指定侯補物件調査として計８件の建造物調査を実施しましたが、本報告書はこれらの調査結果に加え、旧仙台市長公舎の解体に伴う緊急実測調査の内容を紹介し、文化財保護の一助となる資料としてまとめたものです。本書によって、行政や研究者のみならず、広範な市民のご理解が一層深められるよう願ってやみません。

本調査の実施と報告書の作成にあたり温いご協力をいただいた文化財所有者及び管理者各位、並びに調査指導の労をお取りいただいた仙台市文化財保護委員会の佐藤巧副委員長をはじめ関係各位に、心から御礼を申しあげます。

昭和62年３月

仙台市教育委員会

教育長　藤　井　　黎

目　　次

序　文
目　次
例　言
Ⅰ　仙台市指定文化財候補物件調査報告……1
1　成覚寺山門（旧浄眼院殿霊屋門）……1
2　泰心院山門（旧仙台藩藩校養賢堂正門）……6
3　荘厳寺山門……14
4　輪王寺山門……20
5　大願寺山門（旧万寿院殿霊屋門）……26
6　毘沙門堂唐門……35
7　榴ヶ岡天満宮唐門……35
8　シップル館（旧デフォレスト館）……40
Ⅱ　旧仙台市長公舎解体に伴う実測調査……51

例　　言

1　本書は、仙台市教育委員会が昭和59年度並びに昭和60年度に実施した仙台市指定文化財候補物件調査のうち、建造物部門の８件（昭和59年度＝３件、昭和60年度＝５件）の調査結果をまとめ、これに昭和60年春の旧仙台市長公舎解体に先立って実施した実測調査の結果を加えたものである。

2　仙台市指定文化財候補物件調査に関する建造物８件については、実測、図面作成、写真撮影、及び調書作成を東北大学工学部建築学科教授佐藤巧氏（現、東北工業大学教授。仙台市文化財保護委員会副委員長）に委託して実施した。また、旧仙台市長公舎解体に伴う実測調査については、株式会社松井建設東北支店（熊谷新二支店長）に委託して実施した。

3　仙台市指定文化財候補物件調査に関る建造物８件のうち、成覚寺山門(旧浄眼院殿霊屋門)、荘厳寺山門、輪王寺山門の３件は昭和61年12月20日付、泰心院山門（旧仙台藩藩校養賢堂正門)、大願寺山門（旧万寿院殿霊屋門）の２件は昭和62年３月26日付で、それぞれ仙台市指定有形文化財として指定するに至った。

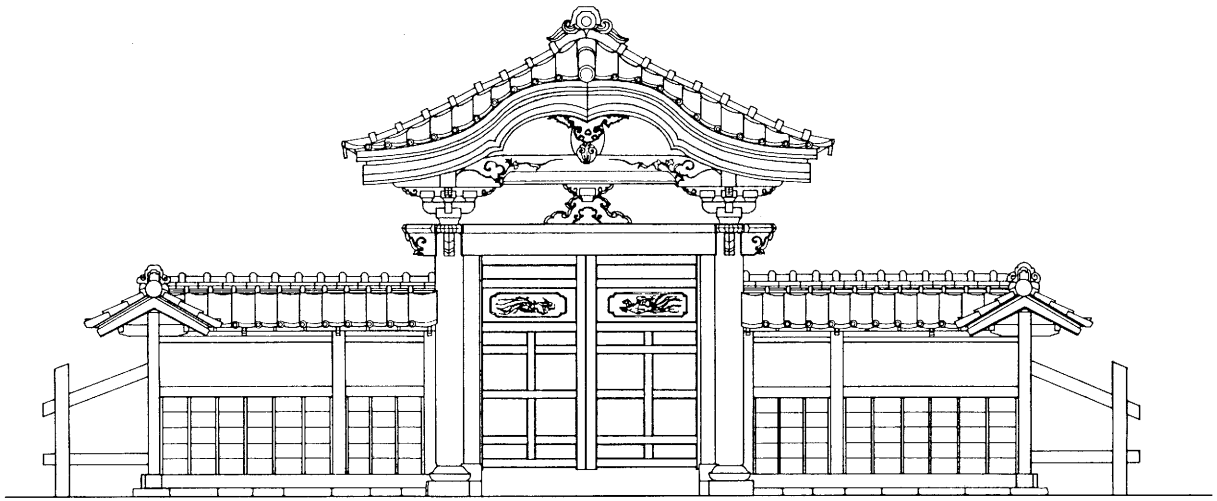
Ⅰ　仙台市指定文化財候補物件調査報告

1　成覚寺山門（旧浄眼院殿霊屋門）

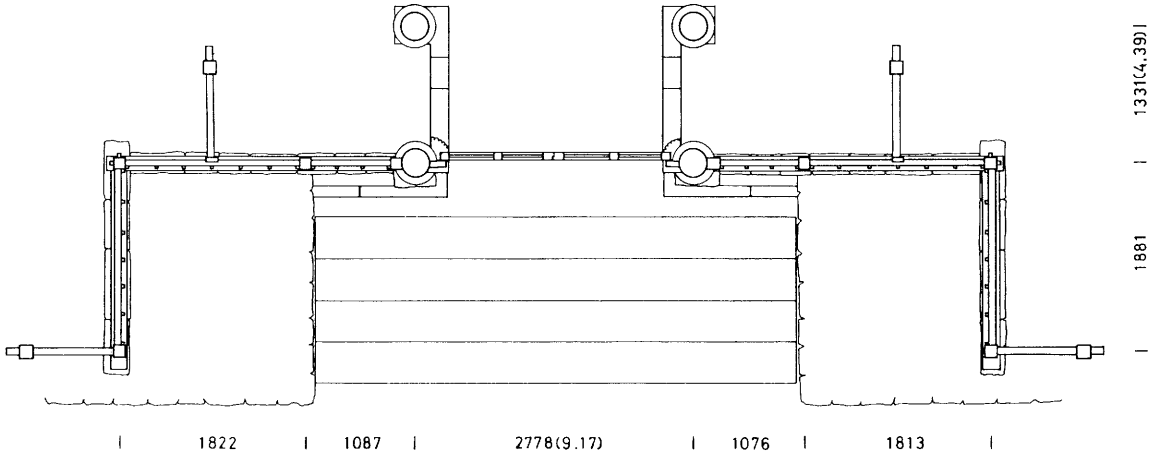
東十番丁の孝勝寺裏に三沢初子（伊達綱村生母）の霊屋があった。その霊屋の門がこれに当り、のちに移築して成覚寺の山門としたものである。従ってこの門は霊屋が竣工した貞享４年（1687）当時の建築と考えられる。

一間一戸、向唐門、桟瓦葺。４本の柱はいずれも円柱。正面の桟唐戸に鳳凰の彫刻、そして鏡板一面に麻の葉つなぎの文様が彫られている。丸味のある大瓶束、蟇股、破風板に付けられた透し彫り金具など、随所に安定した技法が認められる。もと漆塗りで、往時の華麗さが想像される。軸部に台輪、頭貫を使用、また粽や礎盤のある柱など併せ、榴ケ岡天満宮唐門、大願寺唐門と同巧。17世紀末期の様式のみられる参考例として，伊達家廟建築史上も貴重な遺構である。

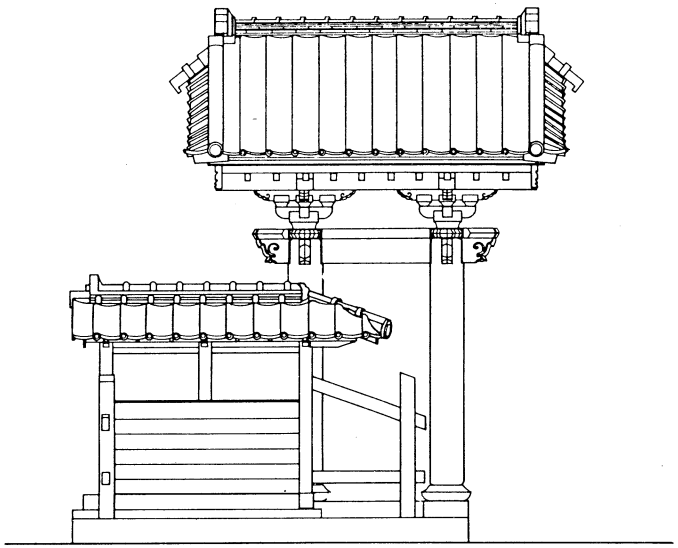
（正　面）



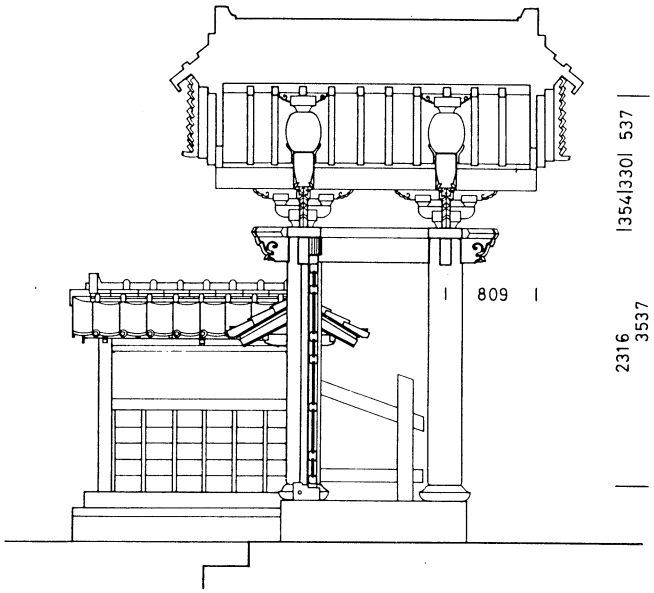
立　面　図



平　面　図



側　面　図



断　面　図

背　　面

背面（右後方より）

大瓶束と蟇股

頭　貫　木　鼻

2　泰心院山門（旧仙台藩校養賢堂正門）

泰心院は曹洞宗の寺院で、伊達政宗の曽祖父稙宗の室、葦名氏台心院の牌寺である。慶長12年（1607）現地に再建されてからも何回か焼失しているが、そのつど再建されている。

この門はもと勾当台にあった藩学養賢堂の正門で、明治初年に泰心院に移してその山門としたものである。

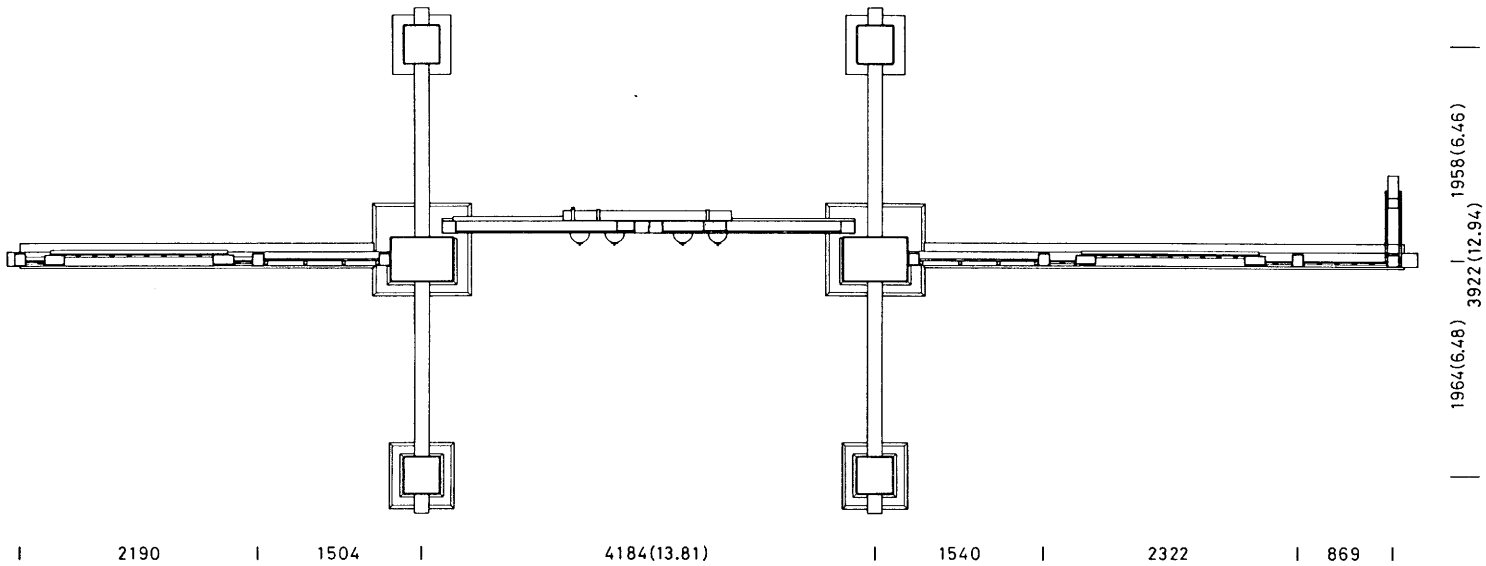
角柱の本柱に２枚の板扉を吊し、前後にそれぞれ２本ずつ計４本の支柱（いずれも角柱）を配した四脚門の形式である。

素木造りで、屋根切妻造り、桟瓦葺。屋根の棟を漆喰塗とし、立引両と九曜の紋を交互に付け、棟の両端上に鯱を載せている。

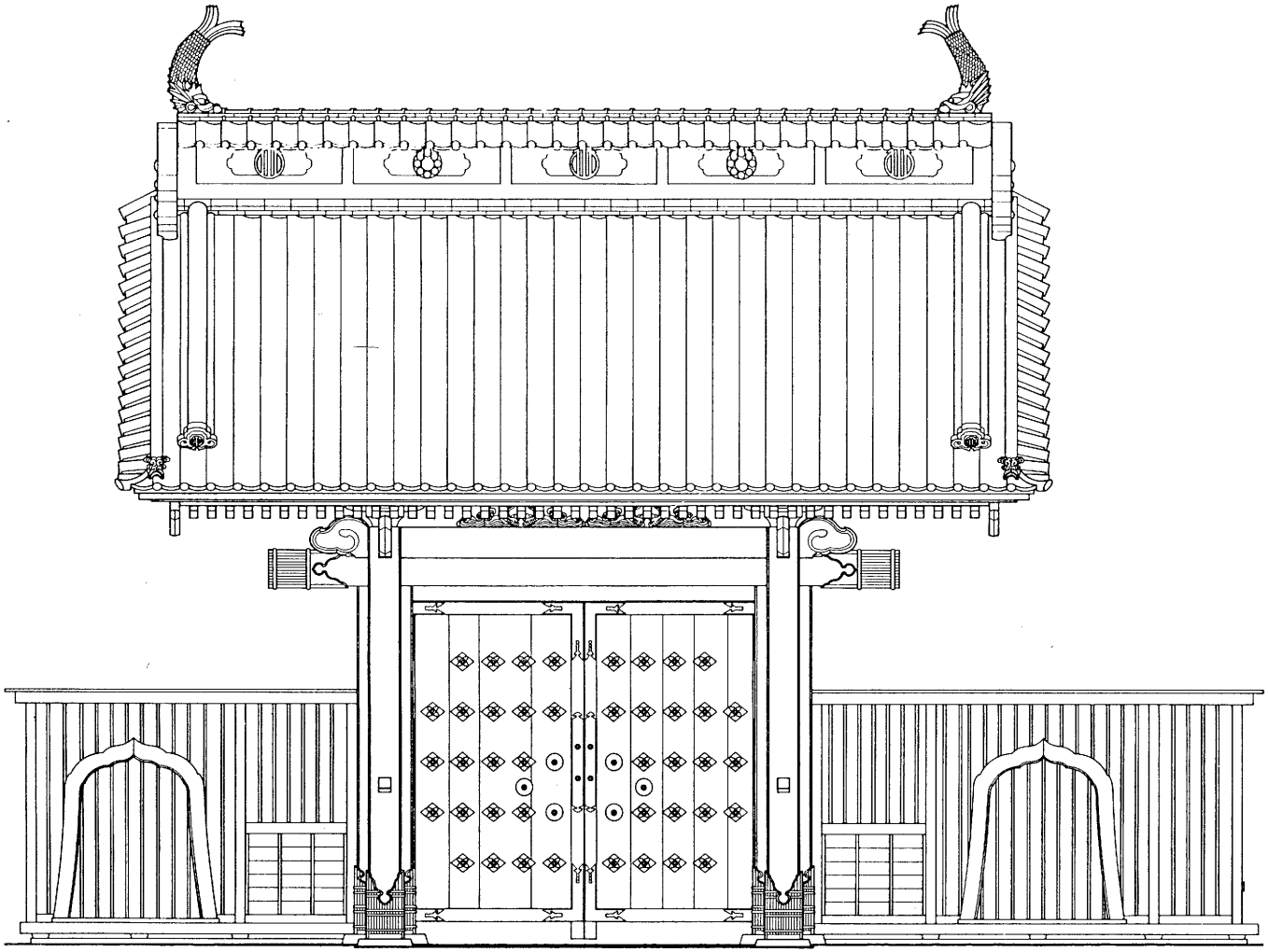
軒は二軒繁垂木で、本柱上に冠木桁を渡す。冠木桁の端部および本柱、前面支柱の脚もとを木製の飾り金具で包む。前後の支柱に架した虹梁の中央に大瓶束を置いて棟木を支えるが、大瓶束の左右には発達した笈形が付く。前面の頭貫上に一対の波形蟇股を配する。

文化14年（1817）の建築で、年代的には比較的新しいが、重厚にして雄大な門であり、すでに失われた仙台藩学校施設の偉容を知り得る唯一の貴重な遺構である。

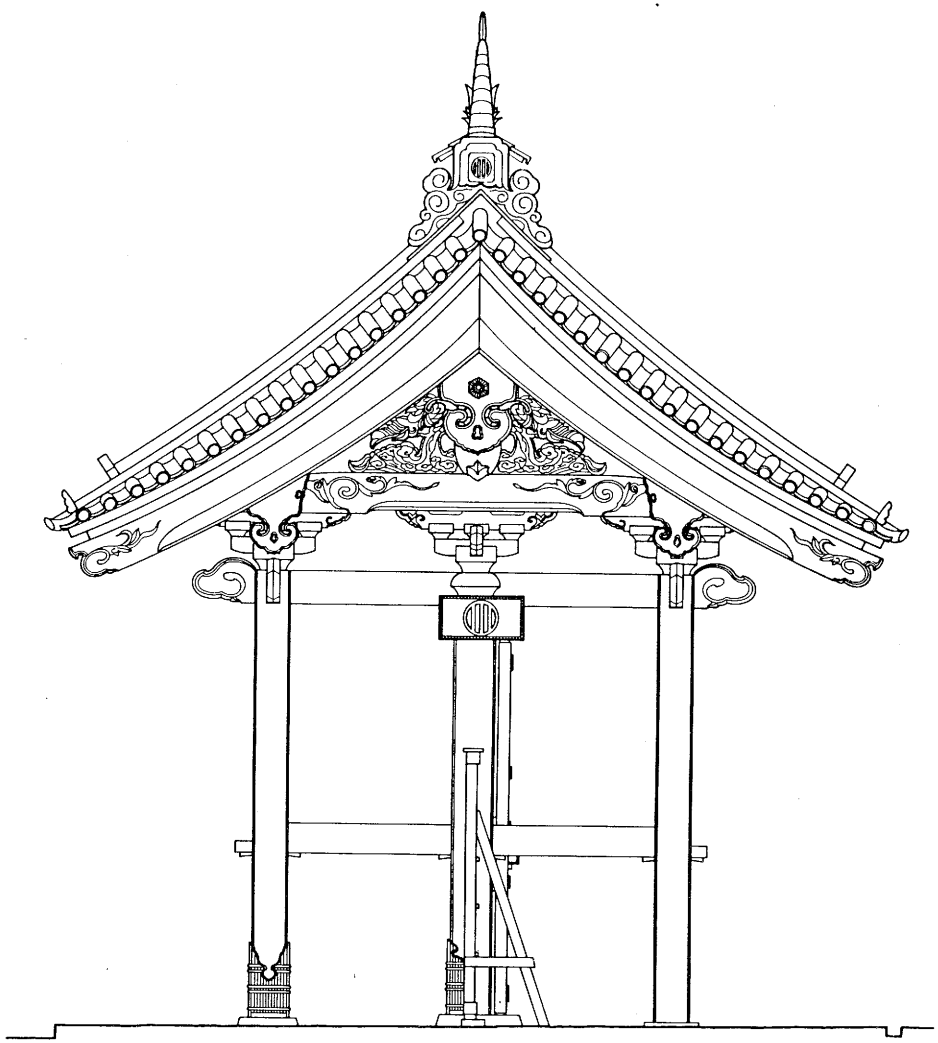
（正　面）



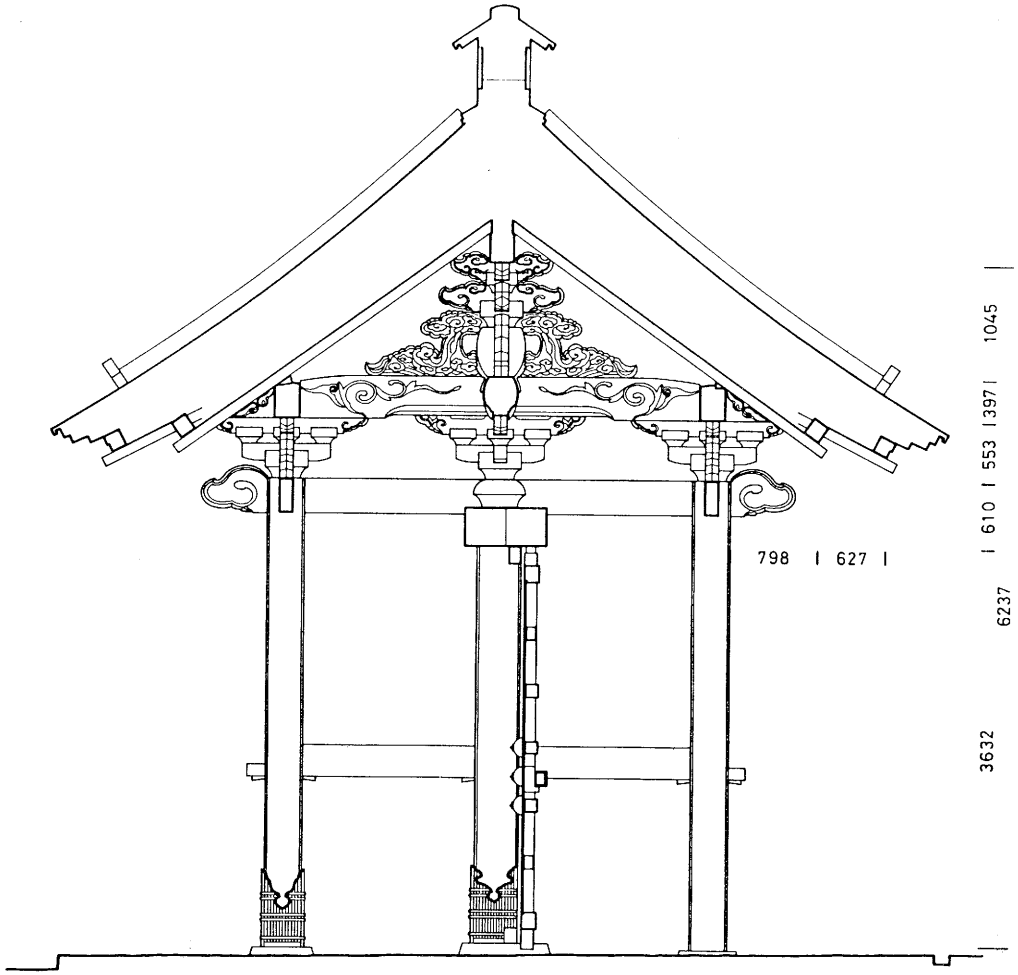
平　面　図



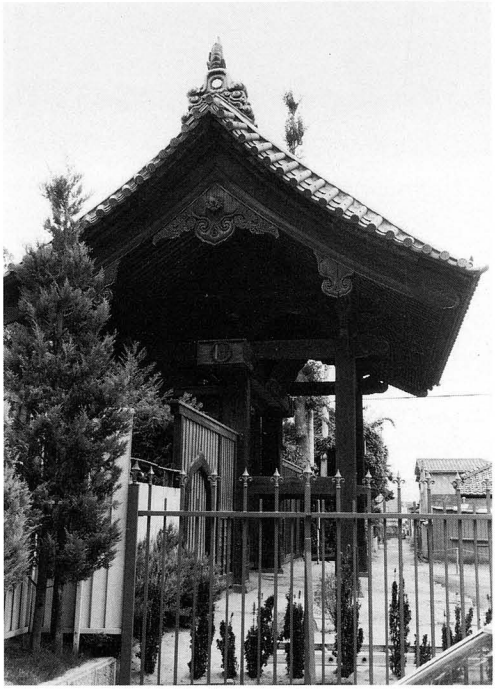
立　面　図



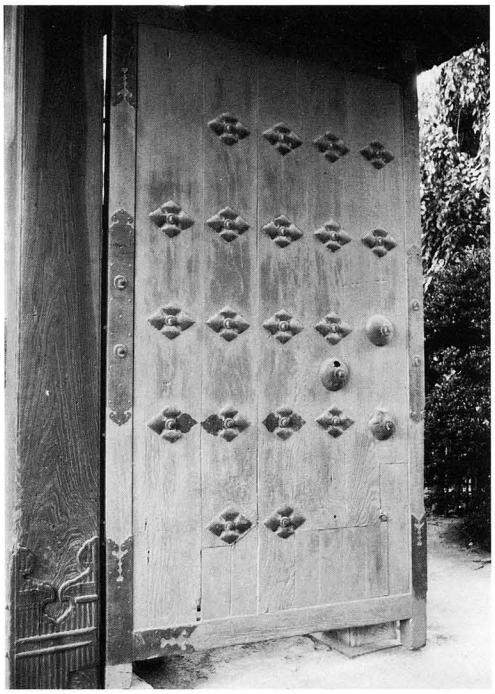
側　面　図



断　面　図



側　　面



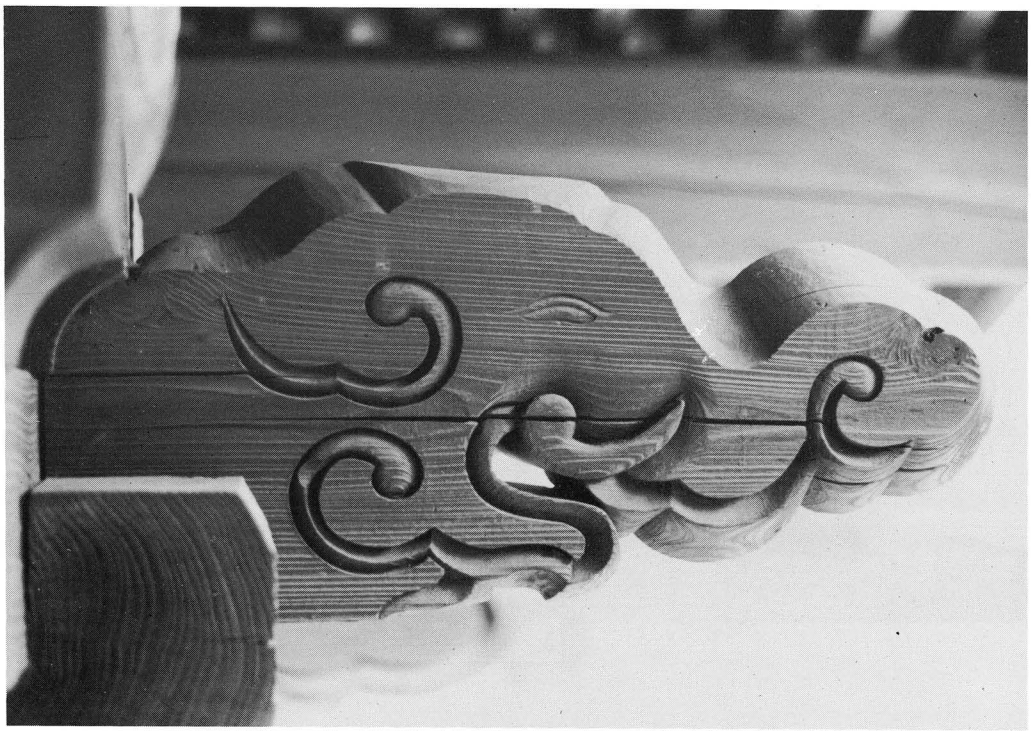
板　　戸

虹梁、大瓶束、笈形

墓　　股

墓　　股

頭 貫 木 鼻



頭 貫 木 鼻

3　荘厳寺山門

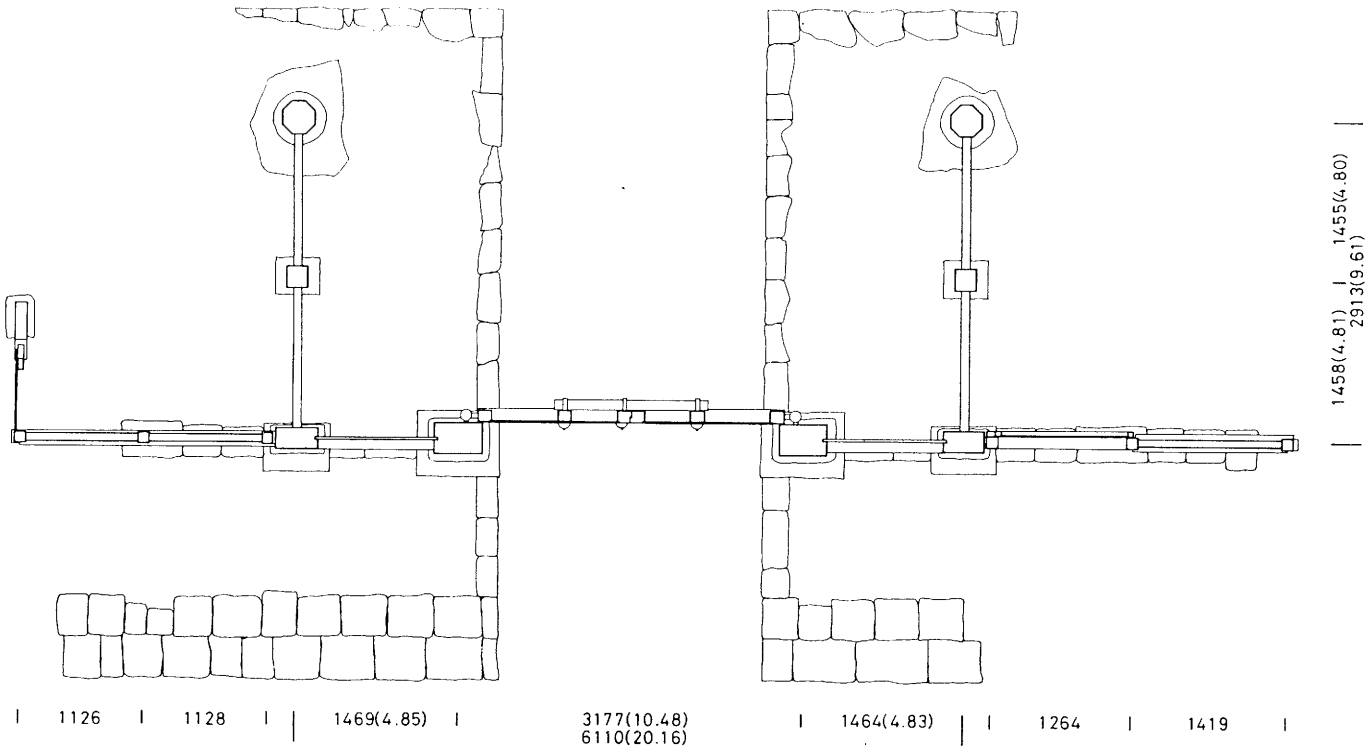
もと片平丁にあった原田甲斐宗輔の屋敷門を、原田氏失脚のあと移築して当荘厳寺の山門としたものと伝えられる。

三間一戸の薬医門で、間行6.11メートル（20.16尺）、奥行2.91メートル（9.61尺）の堂々たる門。屋根は切妻造，桟瓦葺で、軒は一軒疎垂木となる。本柱および脇柱は長方形の断面をもつが、背後の支柱２本は断面八角形の円柱となる。妻飾は六葉を具えた蕊懸魚で、左右に波形の鰭を付ける。板扉には入八双と饅頭金物を打つ。左、右に袖壁が付き、向って右手の袖壁に潜り戸を設ける。

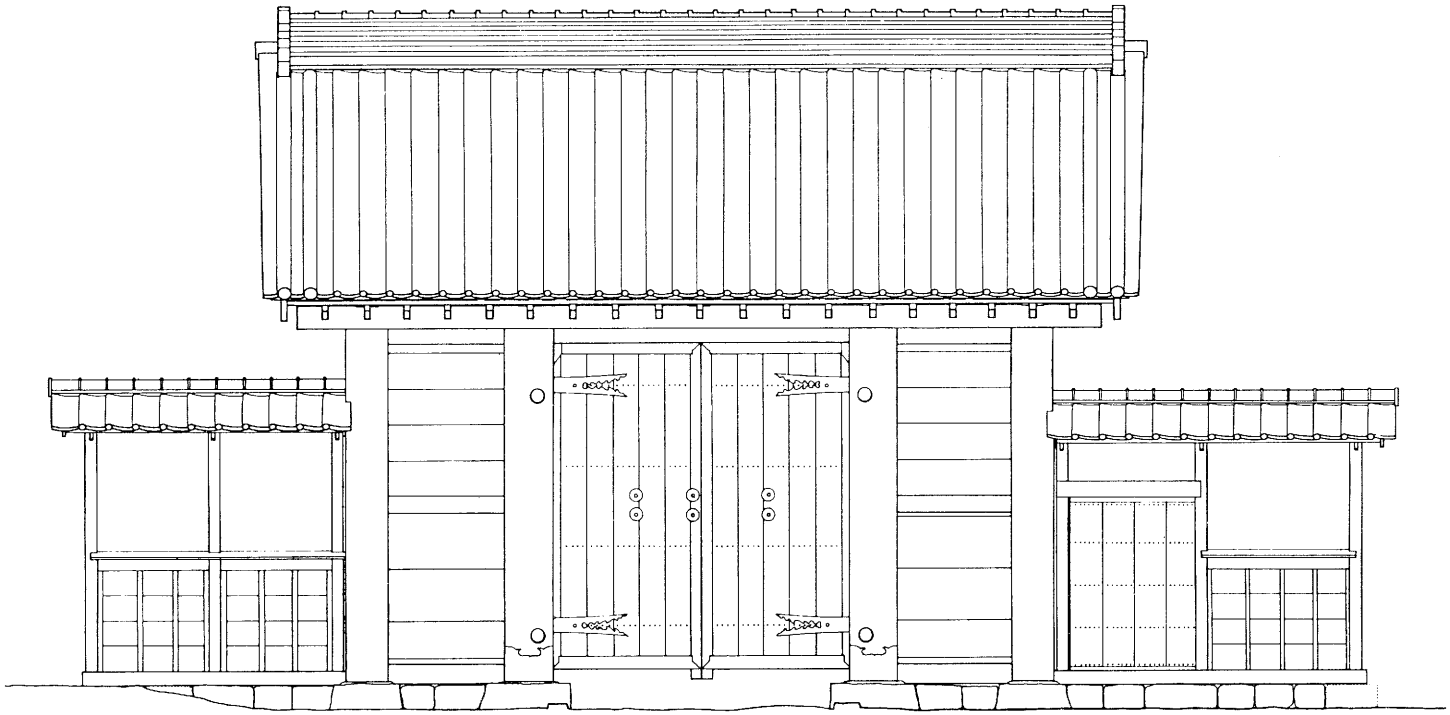
素朴ながら雄健な門で、妻飾の意匠や架構（梁の前面の材は後の補修のあとがみられる）からみて、江戸初期頃の建築と考えられる。

原田甲斐屋敷門との伝承を裏付ける確証はないが、江戸初期の上級武家門の姿を伝える遺構として貴重といえよう。

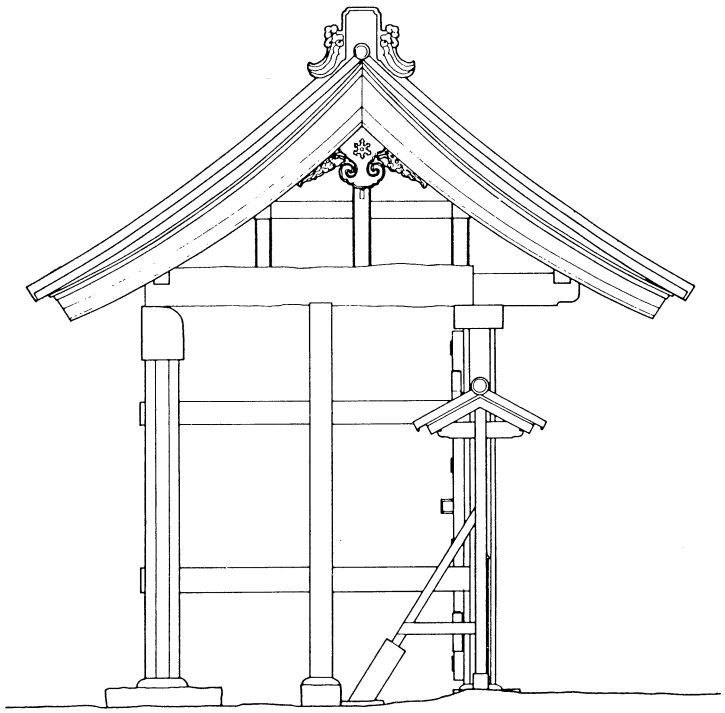
（正　面）


1126
1128
1469(4.85)
3177(10.48)
6110(20.16)
1464(4.83)
1264
1419
1458(4.81)
1455(4.80)
2913(9.61)

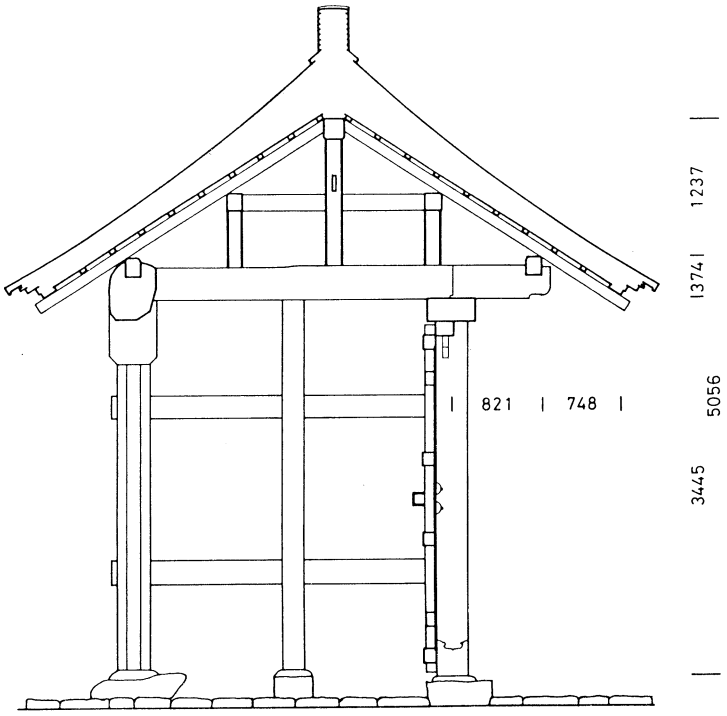
平　面　図



立　面　図



側　面　図



断　面　図

背　　面

側　　面

屋根裏の架構

妻飾懸魚

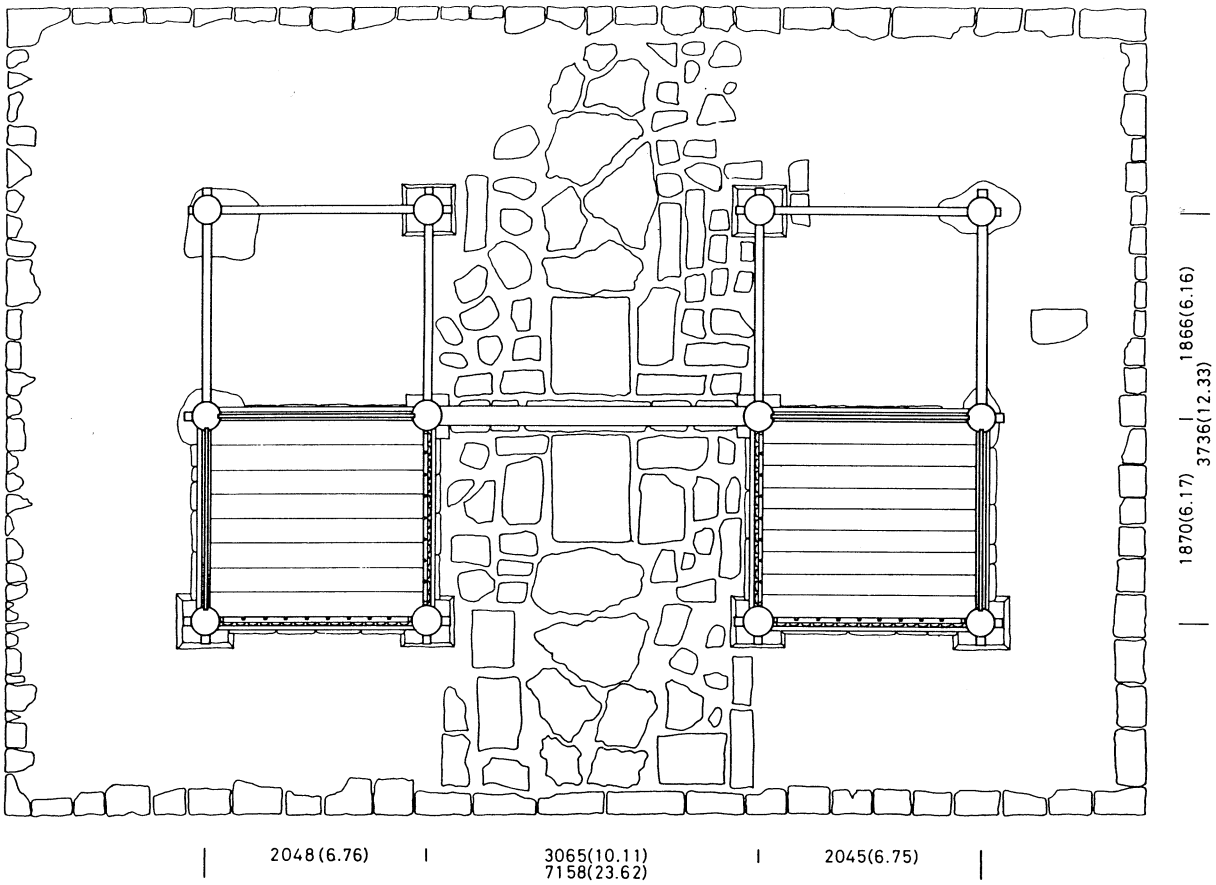
4　輪王寺山門

明治９年３月５日、野火による北山大火の際にも焼失を免れた、輪王寺境内唯一の遺構である。元禄４年（1691）、伊達綱村が本堂、庫裡とともに再建した時のものである。

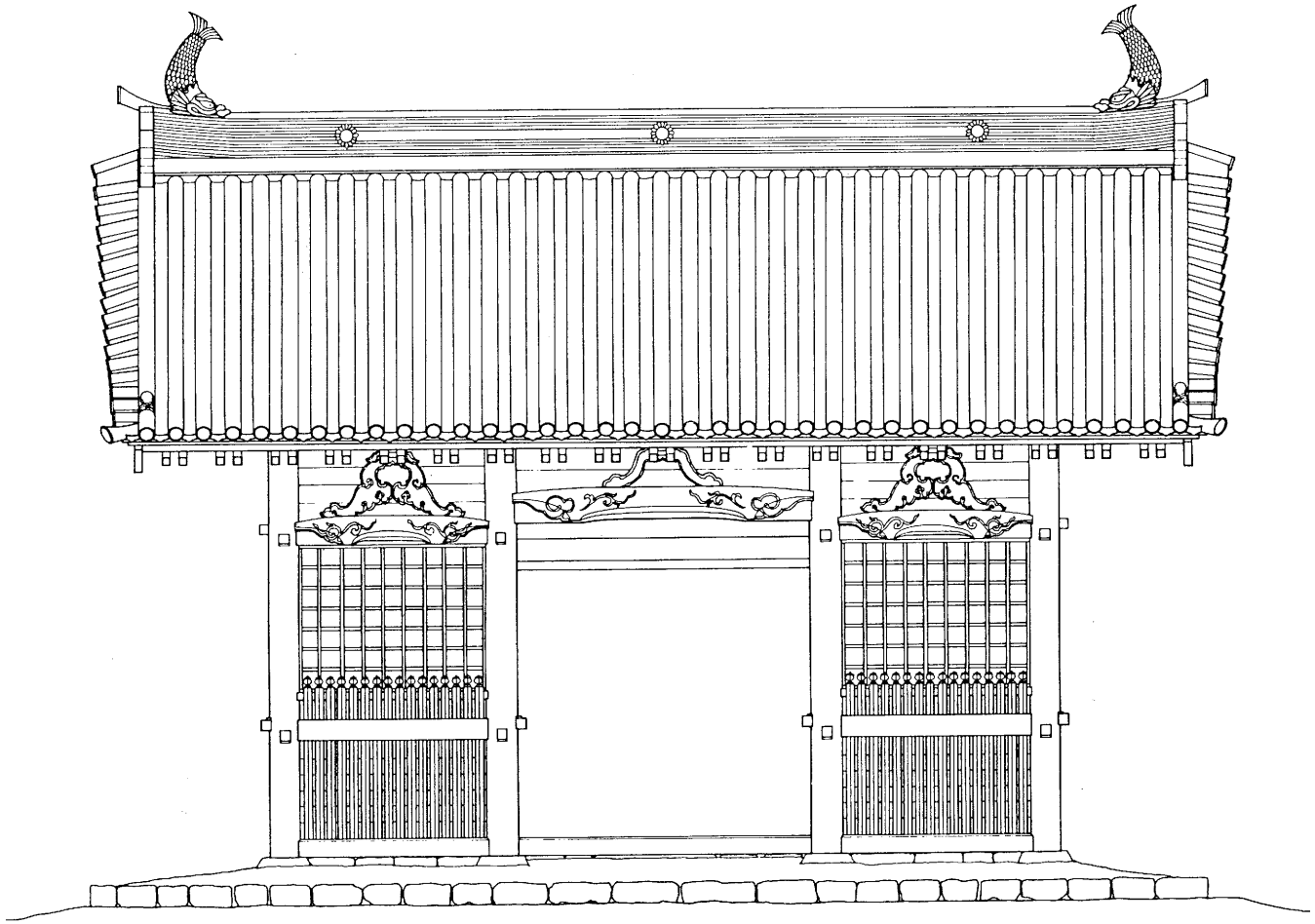
三間一戸の八脚門で、屋根は切妻造、本瓦葺。柱はいずれも円柱で、前面の左、右に仁王像を配置する。梁を二重に渡し、大瓶束を置いて棟を支承する。軒は一軒で吹寄せ垂木。正面の中央間虹梁及び左、右の間の虹梁上に蟇股を置く。蟇股の形状、虹梁の若葉や渦文の彫刻および頭貫木鼻、さらには妻飾の蕊懸魚、その左右の波形の鰭など、総体に江戸中期の堅実な手法がみられる。

建築年代の明らかな江戸中期の代表的遺構である。

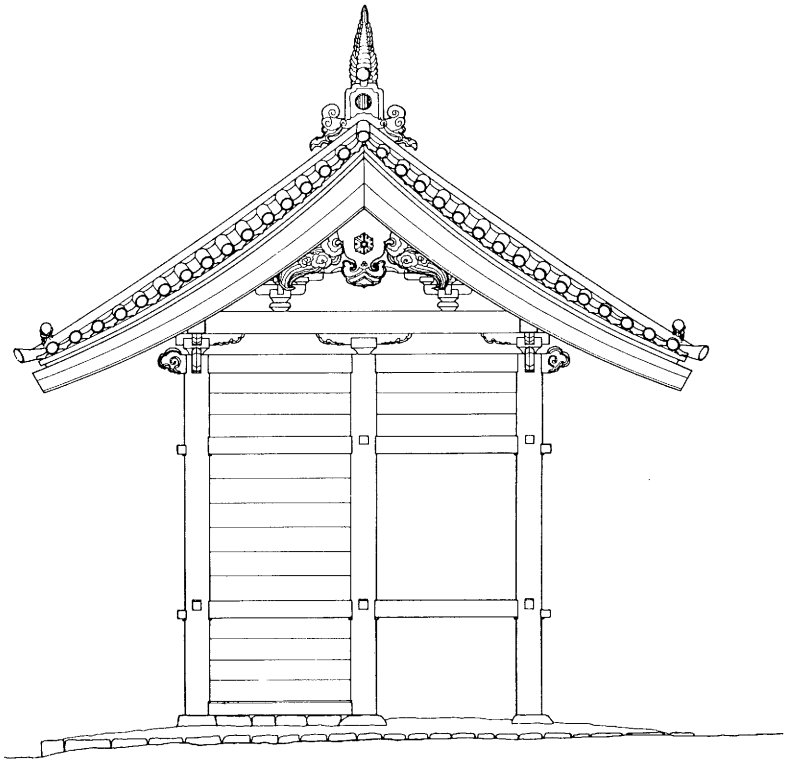
（正　面）


2048(6.76)
3065(10.11)
7158(23.62)
2045(6.75)
1866(6.16)
3736(12.33)
1870(6.17)

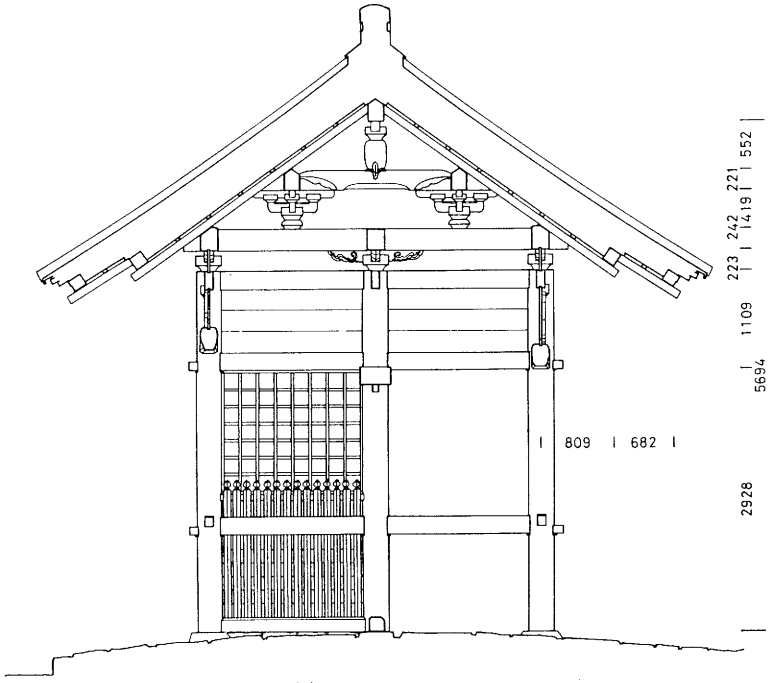
平　面　図



立　面　図



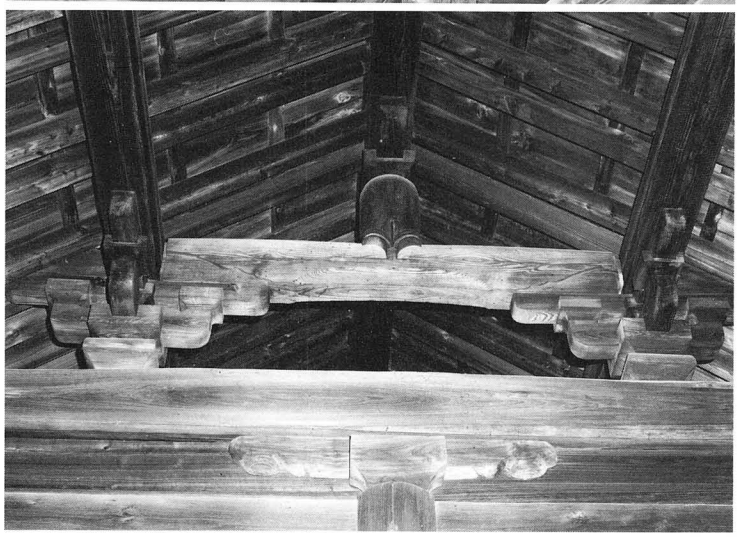
側　面　図



断　面　図

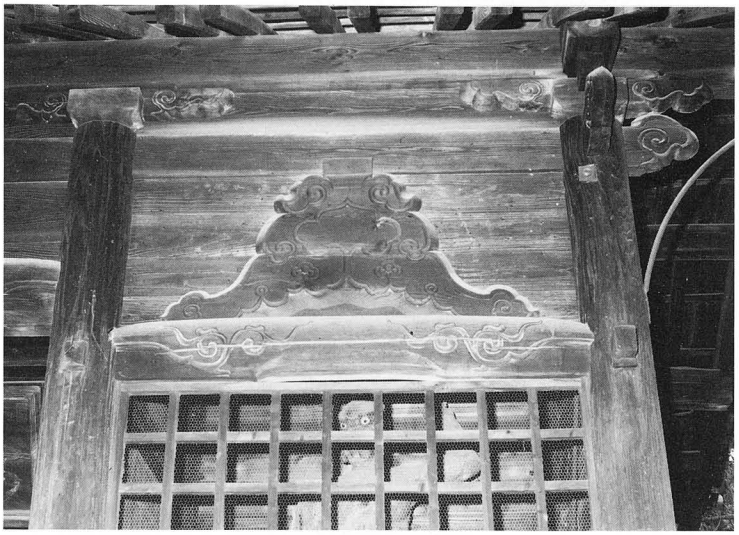
背　　面

屋根裏架構



大　瓶　束

正　面　蟇　股



正面右側蟇股

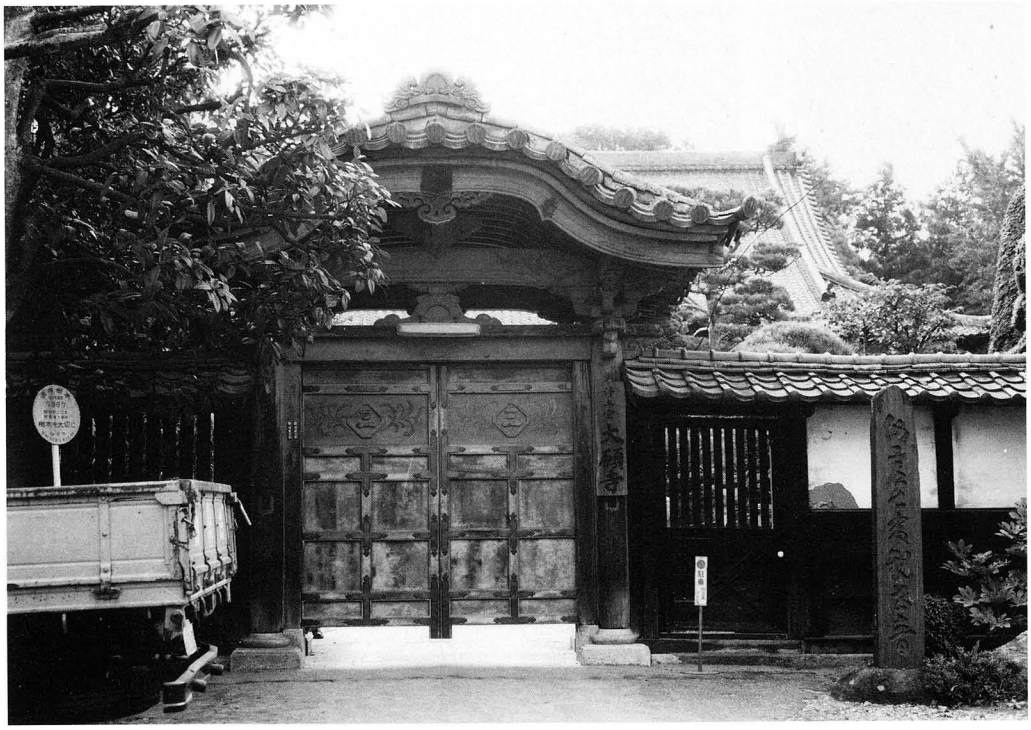
妻　飾　懸　魚

5　大願寺山門（旧万寿院殿霊屋門）

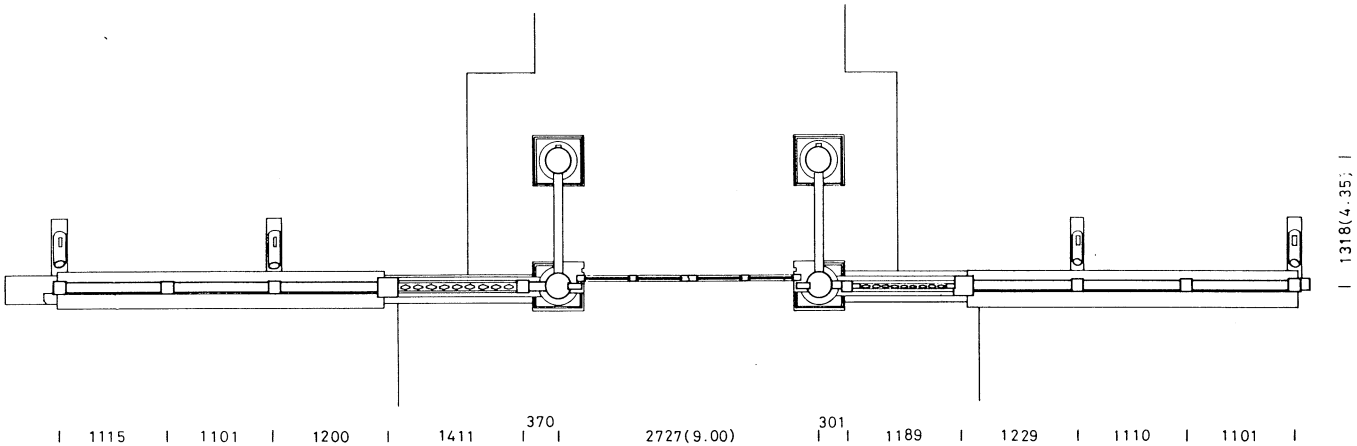
現在は大願寺の山門になっているが、もとは仙台市小田原高松の万寿寺境内にあった、伊達綱村夫人、即ち稲葉氏万寿院の霊屋の門をのちに移建したものである。万寿院霊屋は宝永６年（1709）に竣工しているので、この門もその頃のものとみて大過ない。

浄眼院夫人の霊屋門（成覚寺山門）と同形式の向唐門であるが、屋根は現在桟瓦葺となっている。４本の円柱は上、下に禅宗様特有の粽を有し、礎盤の上に立つ。その他、肘木の曲線、台輪、頭貫の木鼻に同じく禅宗様の手法を用いている。桟唐戸には夫人の生家稲葉氏の家紋が付いている。木部は全面漆塗り。

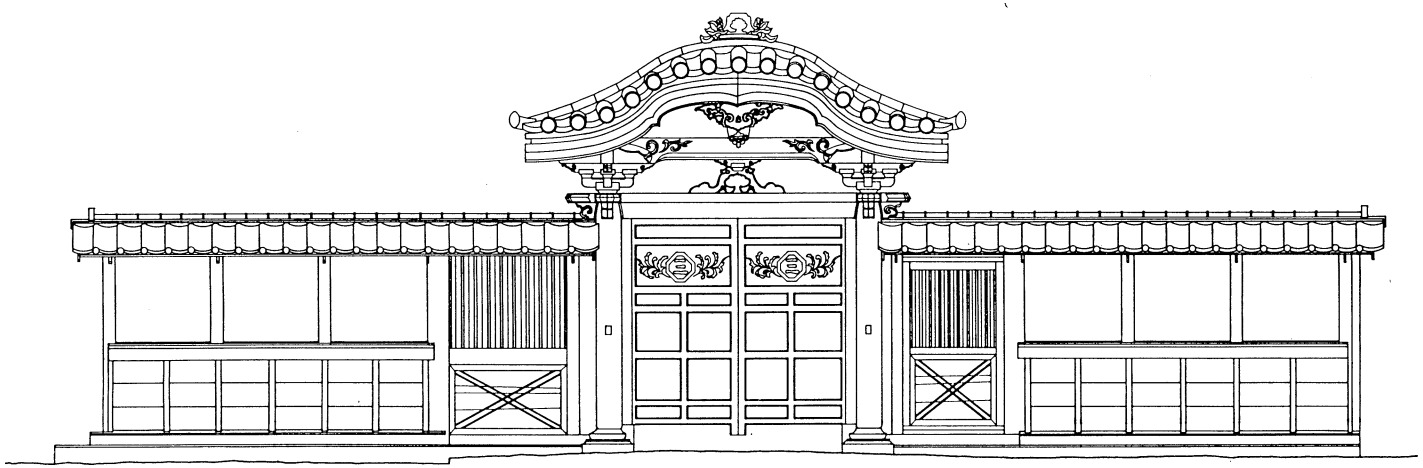
浄眼院夫人霊屋門と同様、伊達家廟門の形式を伝える貴重な例である。浄眼院夫人霊屋門に較べて時代はやや新しいが、年代の明確な、様式の上でも一応標準とすることのできる建築である。蟇股の形状、大瓶束の形、虹梁若葉の線など近いものがあるとはいえ、時代の差も認められて興味深い。



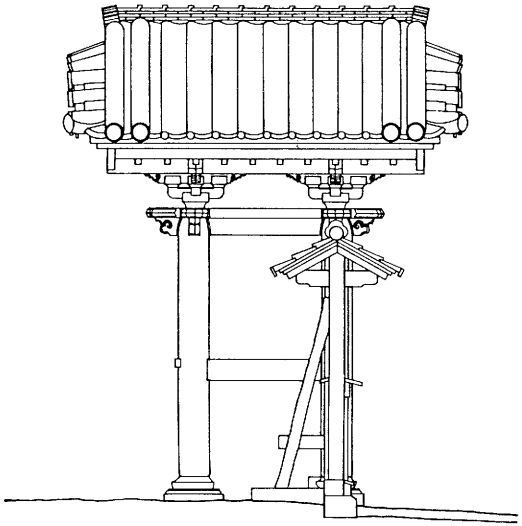
（正　　面）


1318(4.35)
1115
1101
1200
1411
370
2727(9.00)
301
1189
1229
1110
1101

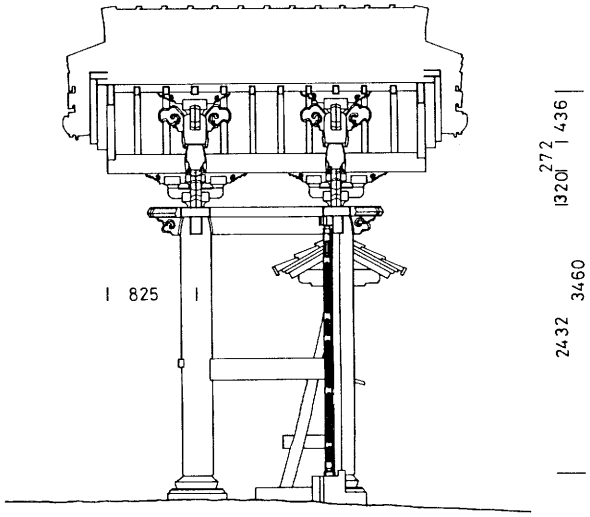
平　面　図



立　面　図



側　面　図



断　面　図

背　　面

蟇股、虹梁、大瓶束

頭　貫　木　鼻

6　毘沙門堂唐門

毘沙門堂は真言宗満福寺の本堂に当るが、旧本堂は二代藩主伊達忠宗の寛永20年（1643）に造営されたものといわれる。

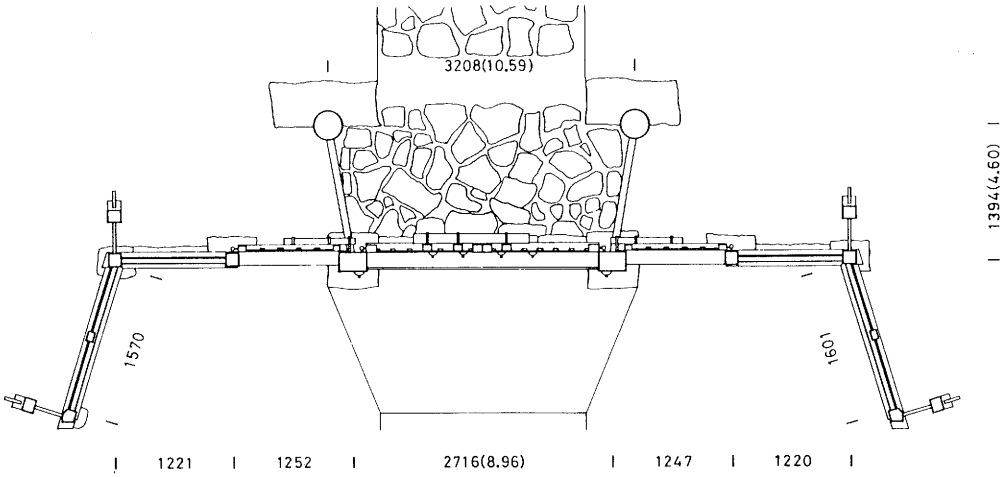
当唐門の建築年代は不詳であるが、虹梁、拳鼻、実肘木などにみられる意匠的手法から推して、江戸時代中期頃の作例とみられる。

当門は２本の角柱上に本瓦葺の平入り屋根を載せた棟門形式であり、その妻側を唐破風にした、いわゆる平唐門である。平唐門は正面を唐破風にした向唐門に較べて一般には簡素で、その発生も唐門としては一段古い形式とみられている。

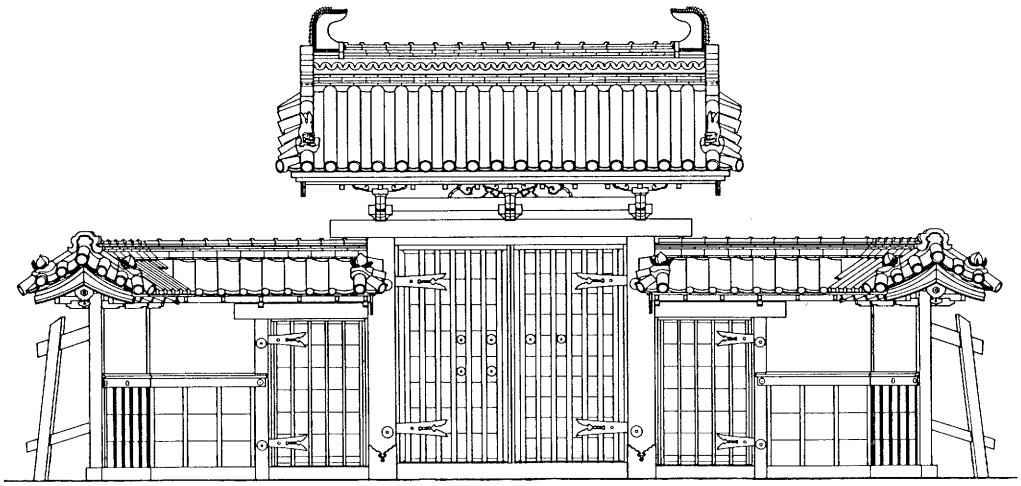
冠木桁に直交して架せられた出桁状の梁の上に左、右の妻では虹梁を平行に渡して大瓶束をたて、中央では蟇股を置き、それぞれ棟木を支えている。板扉の正面竪桟には鉄板が打ち付けられている。妻飾りの懸魚は鰭と一枚板から作り出され、また、棟に鴟尾を載せているのも珍しい。

比較的小規模な門であるが、屋根は重厚で、意匠は洗練されたものがあり、江戸中期の平唐門遺構として貴重な存在である。

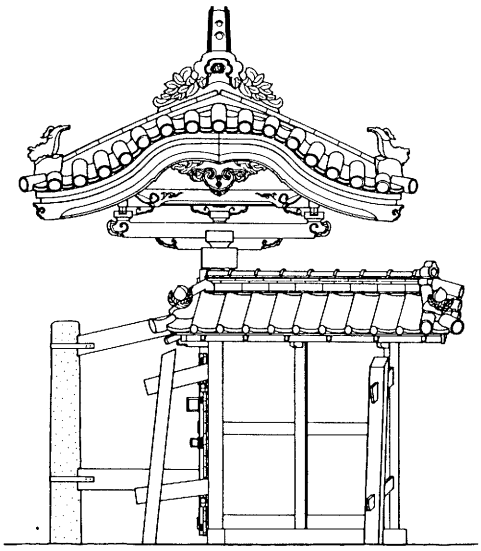
（正　面）



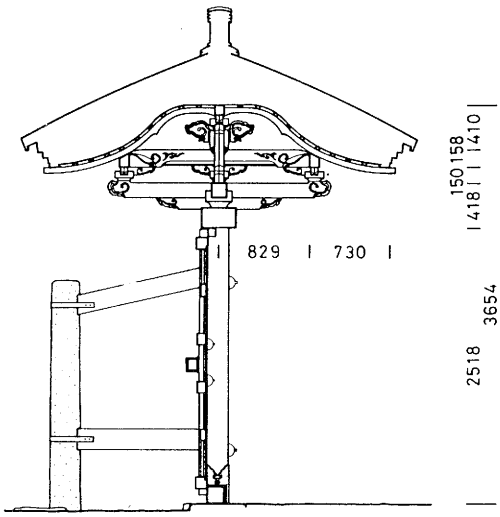
平　面　図



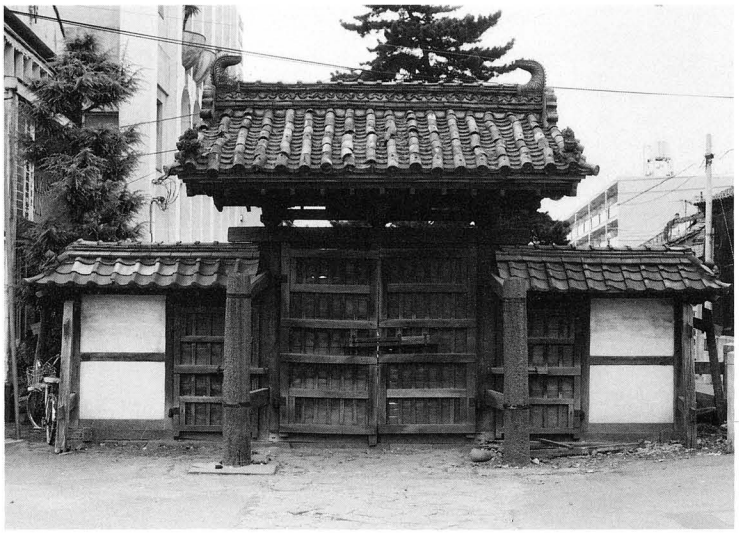
立　面　図



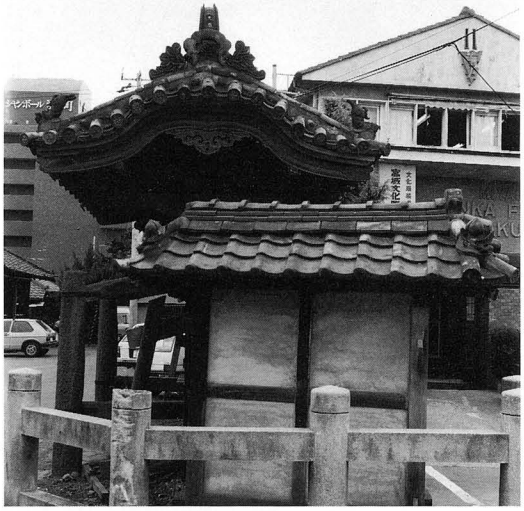
側　面　図



断　面　図

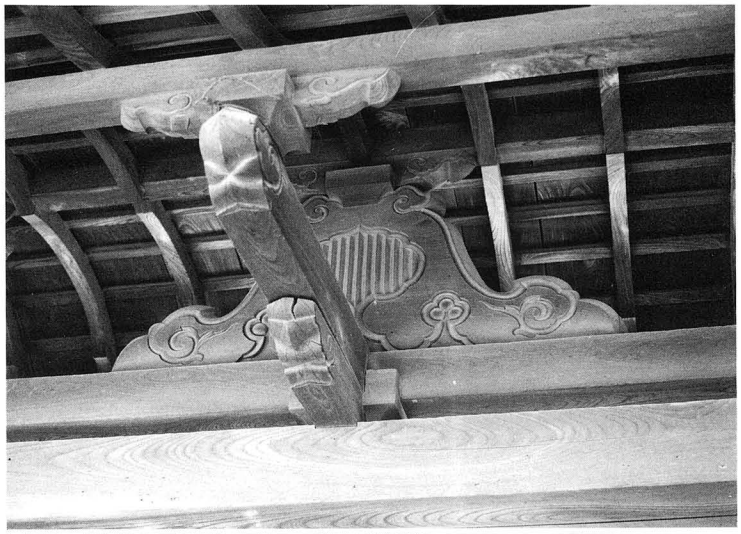


背　　面

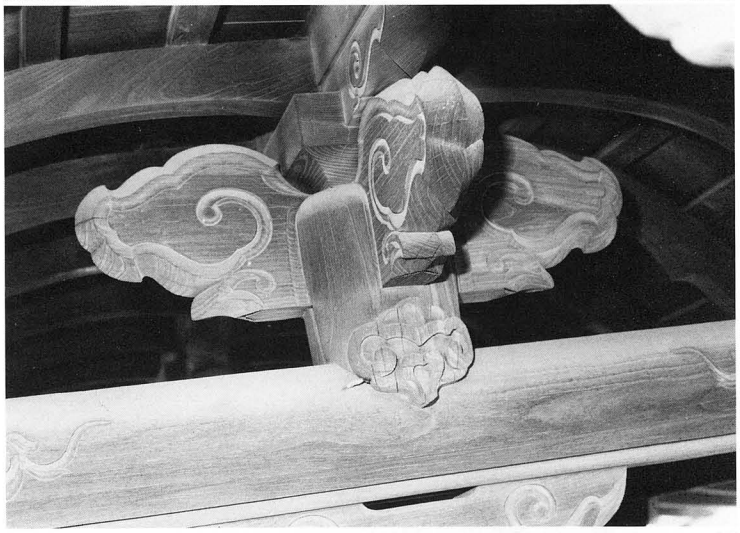


側　　面

懸　　魚



墓　　股



拳　　鼻

実　肘　木

7　榴ヶ岡天満宮唐門

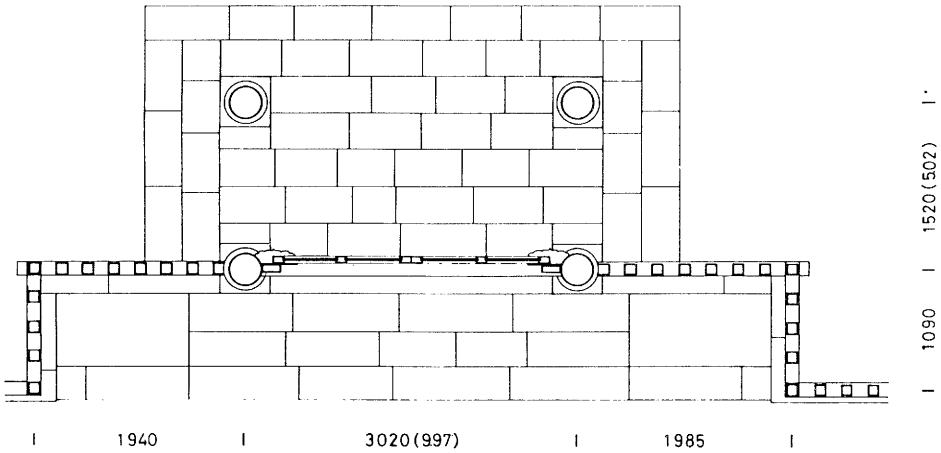
榴ヶ岡天満宮は二代藩主伊達忠宗が東照宮造営のとき、その地にあった天満神社をここに移したもので、四代藩主伊達綱村が釈迦堂を造営するとき、天満宮の本殿、拝殿等を整えた。その後たびたび改修されたが、唐門だけが当時の姿を留めている。

一間一戸、向唐門、銅板葺（もと柿葺か)。棟の鬼瓦上に長く延びた鳥衾に特徴がある。本柱２本、そのうしろの支柱と計４本であるが、ともに円柱で礎盤上に立つ。

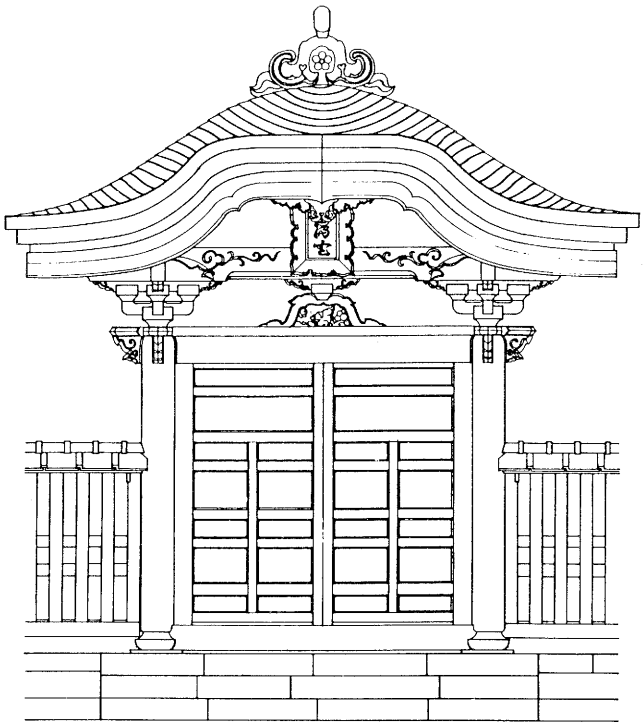
軸部は台輪、頭貫の制で、本柱の間に桟唐戸を吊る以外は前後全く対称的な形をとっている。正面の台輪と虹梁との間に、牡丹に唐獅子の彫刻を施した蟇股が置かれている。背面にも牡丹彫刻の蟇股が配されている。

礎盤、柱の粽、台輪の使用など、禅宗様の手法が多くみられる。総欅造りで朱塗。頭貫木鼻の絵様、大瓶束の形状、虹梁に施された彫刻模様、蟇股の意匠などに、江戸中期を降らない堅実な様式的特徴が示されている。

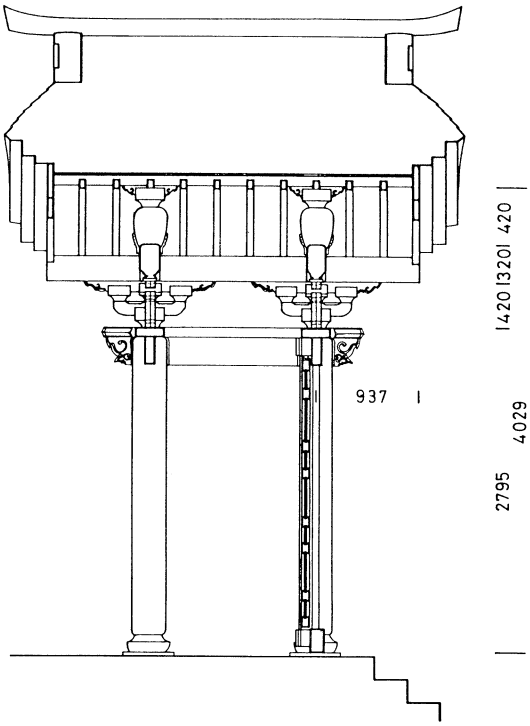
（正　面）



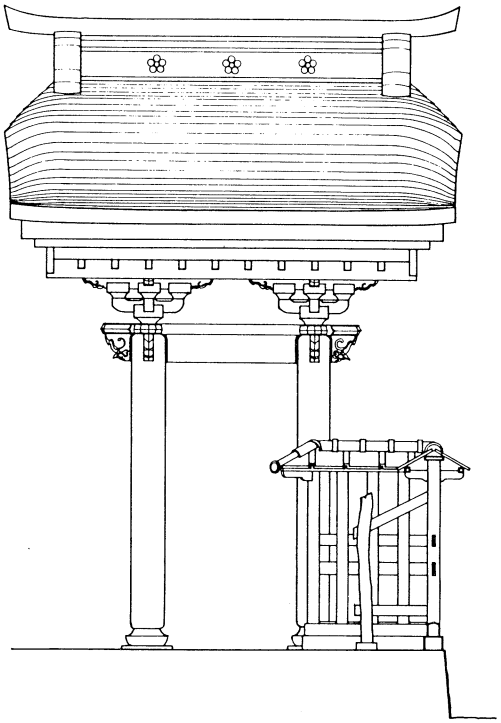
平　面　図



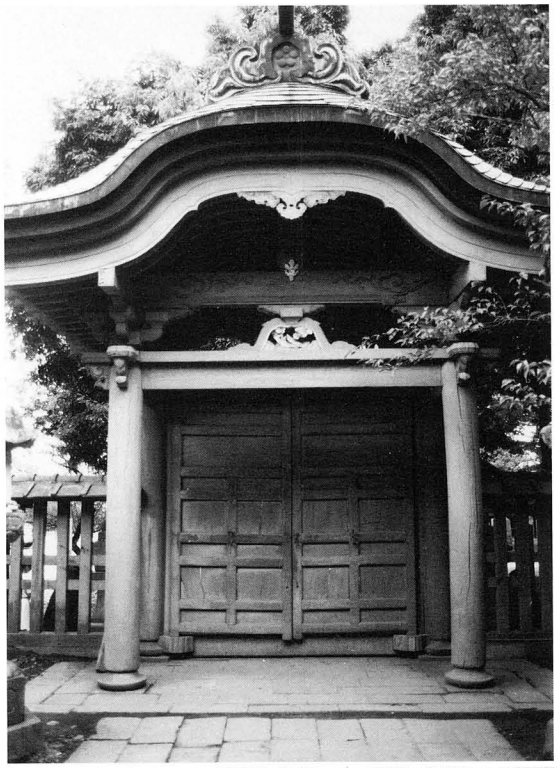
立　面　図



断　面　図

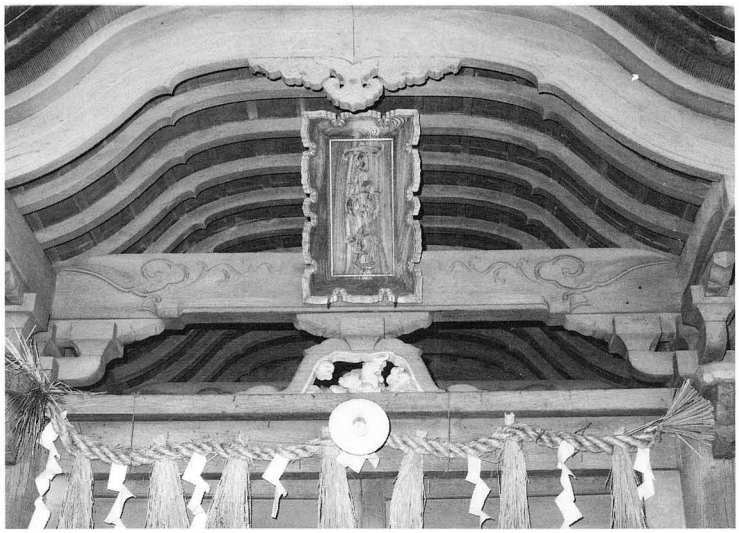


側　面　図



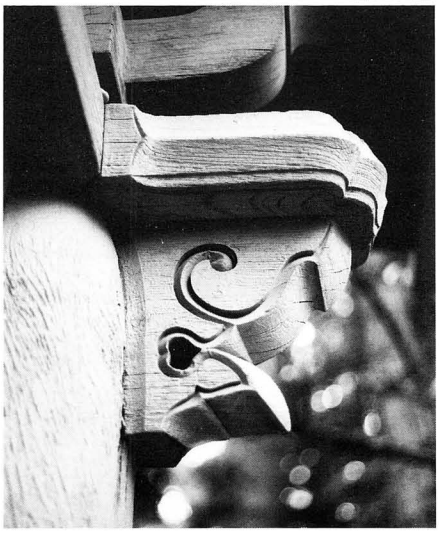
背　　面

側　　面



懸魚、虹梁、蟇股

蟇　　股



木　　鼻

8　シップル館（旧デフォレスト館）

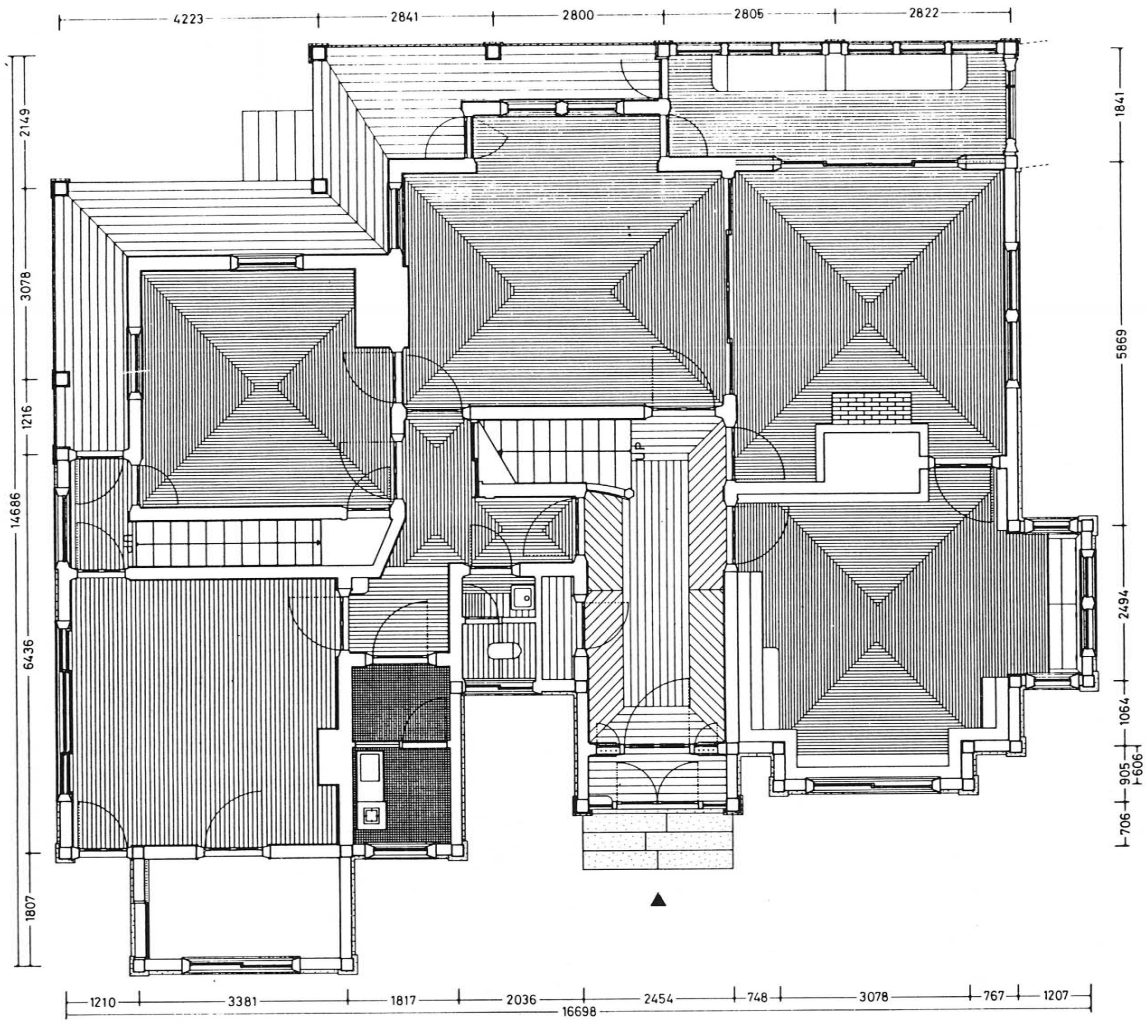
明治20年頃の洋風住宅建築。東華学校教師、宣教師として来仙したアメリカ人、ジョン・ハイド・デフォレスト（John Hyde Deforest）が住んだ。後にシップル神父が居住した。デフォレストはアメリカのコンネクトカット州ウェストブルックの出身で、1844年の生れ、若いとき南北戦争に従軍し、やがてエール大学及び同大学神学部を卒業し、明治７年（1874）にキリスト教宣教師として来日した。12年間大阪市に滞在し、その後明治19年（1886）から５年間東華学校の教師をつとめた。

この住宅は、同氏が仙台に着任したとき、南六軒丁１番地（現在は東北学院大学構内の西端にあたる）の高台の位置を選んで南向きに建てられ、八木山、広瀬川を見渡す絶佳の環境をもっている。

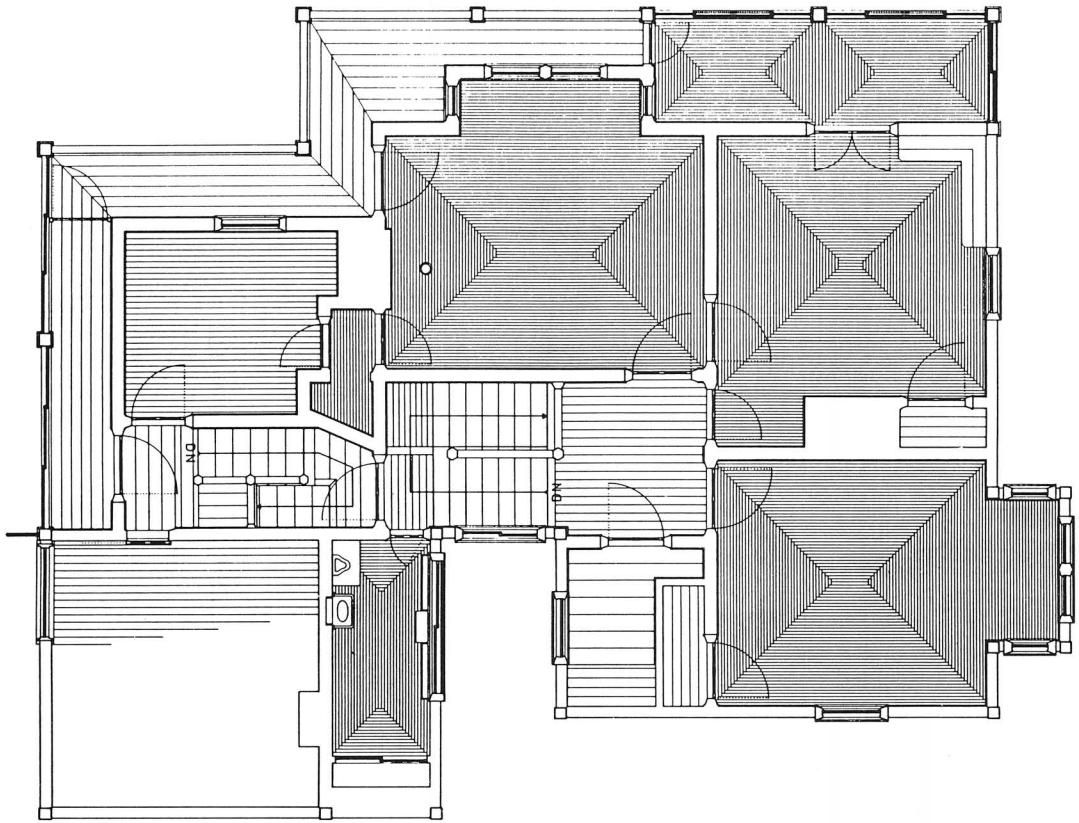
煉瓦積の基礎の上に立つ木造二階建てで、屋根は寄棟造り、スレート葺き。外壁は下見板張り、ペンキ塗りであるが、ベランダに面するところは漆喰塗。開口部に上げ下げ窓と引違窓とを用いる。軒下および階境に蛇腹が巡る。内部は壁、天井は漆喰塗り、床は寄木造り。一階ホールに面して３室、即ち西側北の位置に書斎、その南側にサンルーム付きの居室，そして南向きの広いダイニングルームを配している。食堂に続いて居室と台所を設ける。二階も一階とほぼ同じ間取構成で、居室等４室が配されている。

玄関ポーチは前面に突出し、洋風の柱を建て、櫛形のペディメント屋根をかけ、和風の蟇股に似た鬼板を載せているのは興味がある。この玄関口は扉が二重に設けられているが、外側の扉は後補で、もとは吹放しであった。内側にセグメンタルアーチ窓のある本来の扉がみられる。

この建物は一部改造されているが、総体的に保存が良く、旧状を遺す。隣接して全く同デザインのブラッドショウ館が建っていたが、解体されて現存しない。明治中期のアメリカ式住宅として貴重な存在である。


4223
2841
2800
2805
2822
2149
3078
1216
14686
6436
1807
1841
5869
2494
1064
905
606
706
1210
3381
1817
2036
2454
748
3078
767
1207
16698

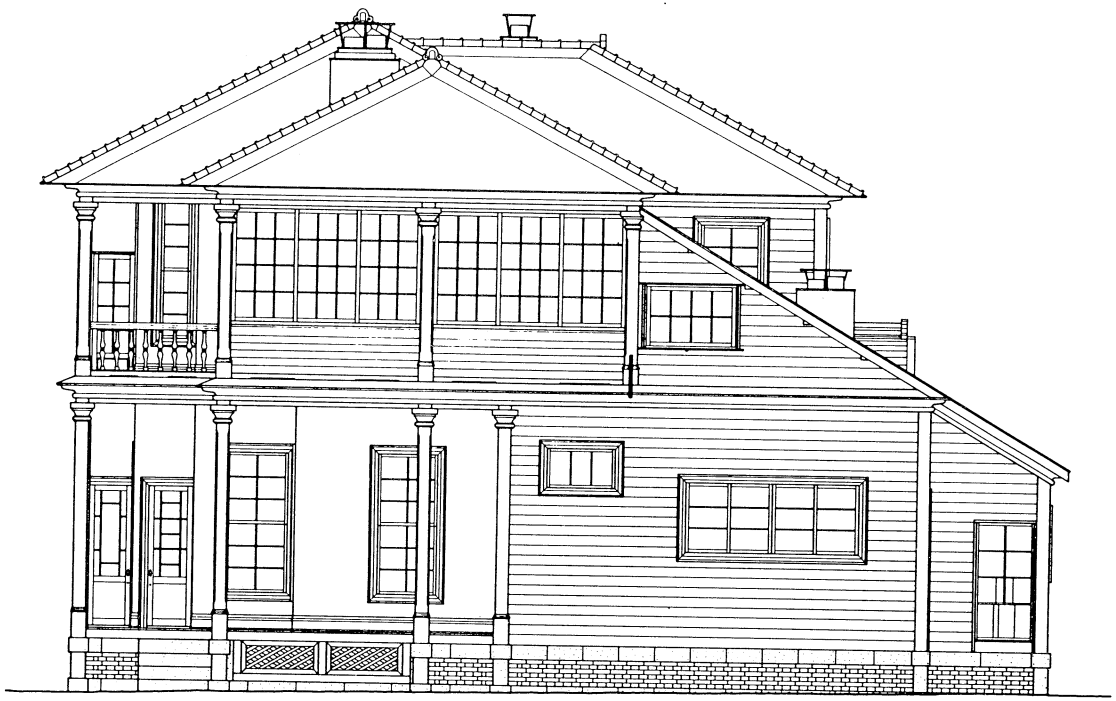
一階平面図



二階平面図

立 面 図（南 面）

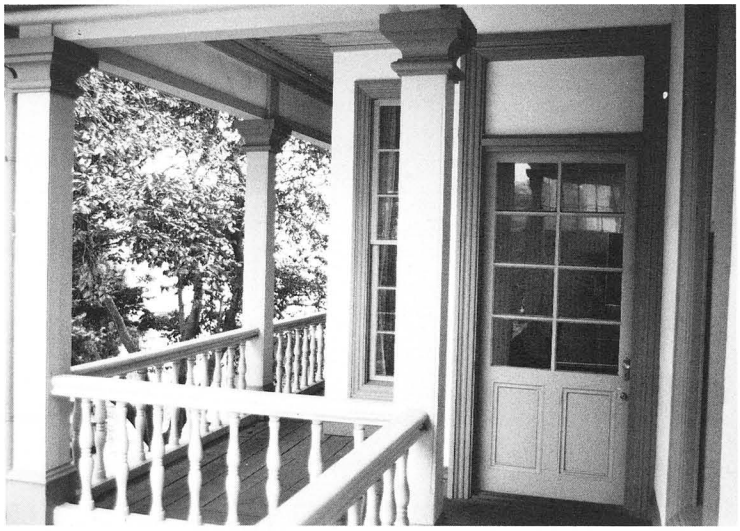
立 面 図（北 面）



立 面 図（東 面）

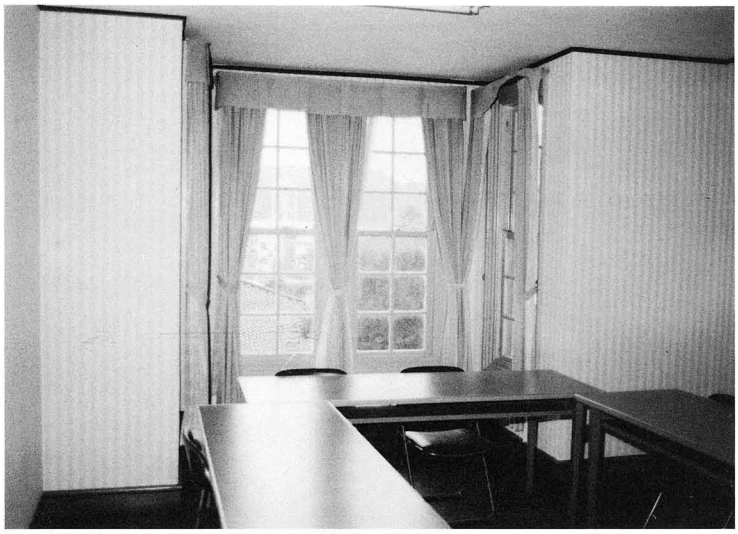
東側面及び屋根

北　　面



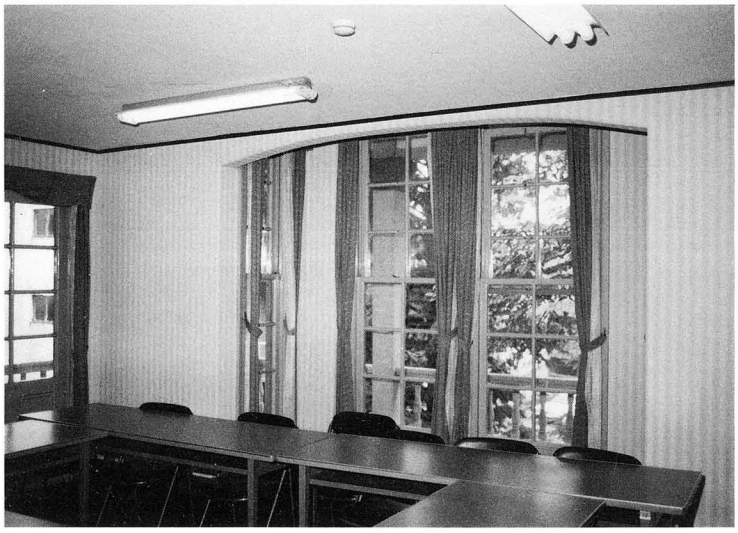
二階バルコニー

軒　下　周　辺



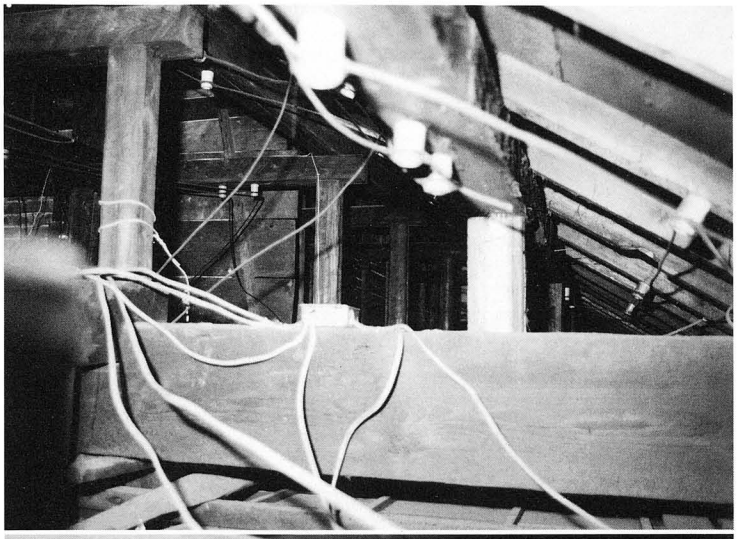
2 階 室 内

内 部 ド ア

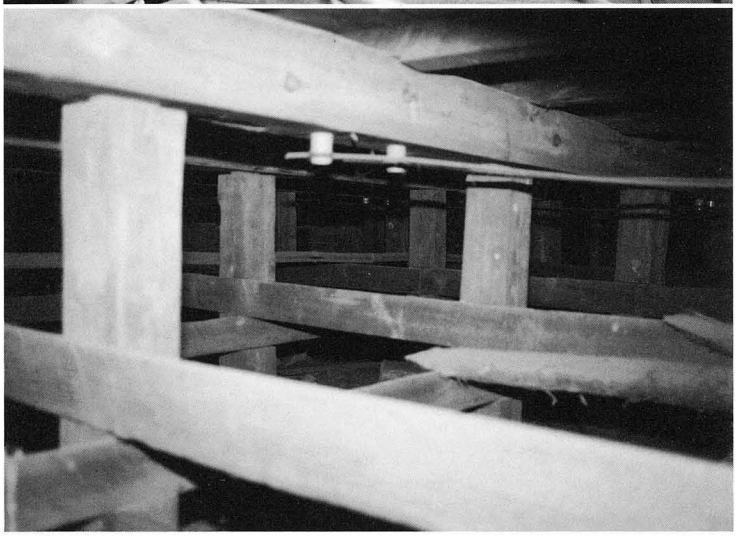


2 階 室 内

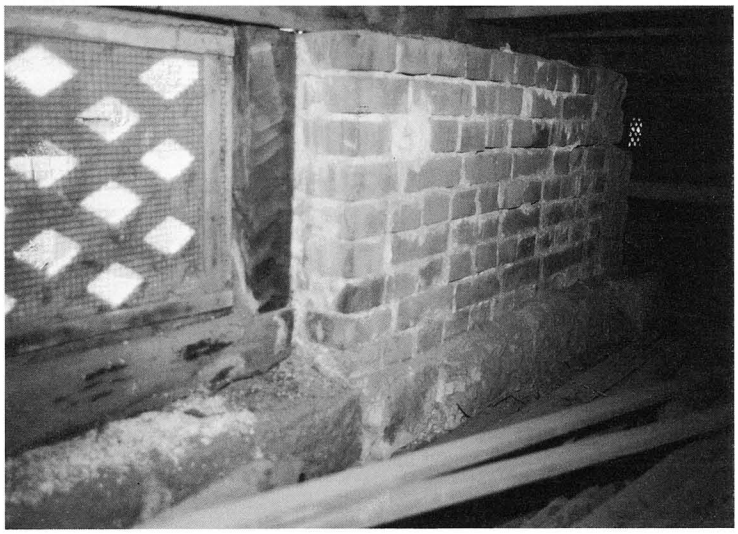
小　屋　裏

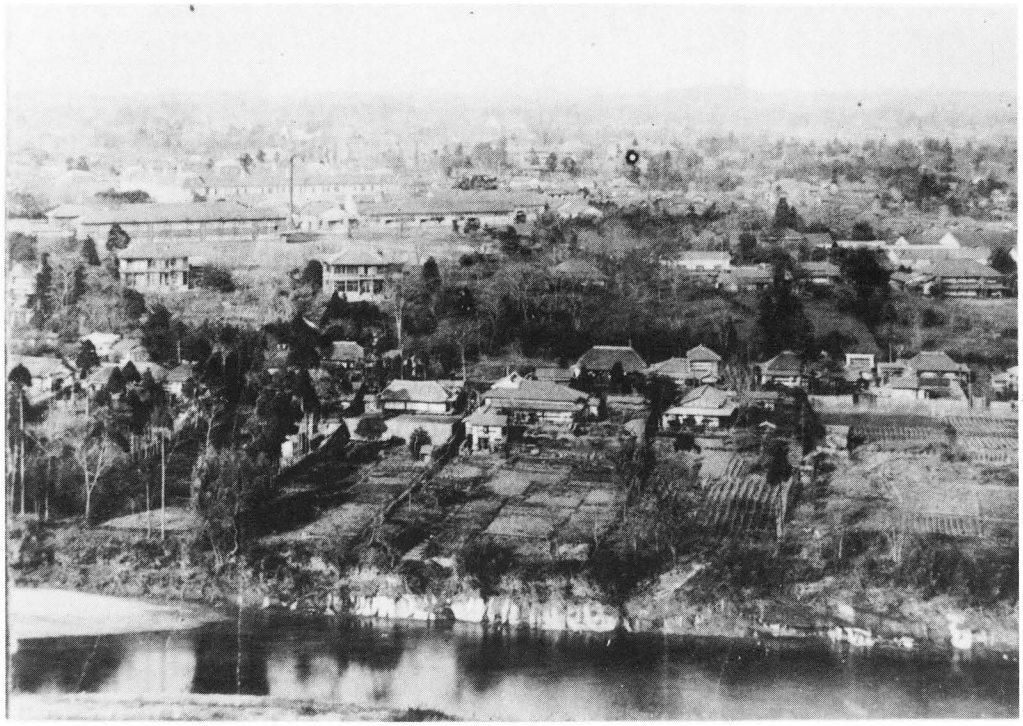


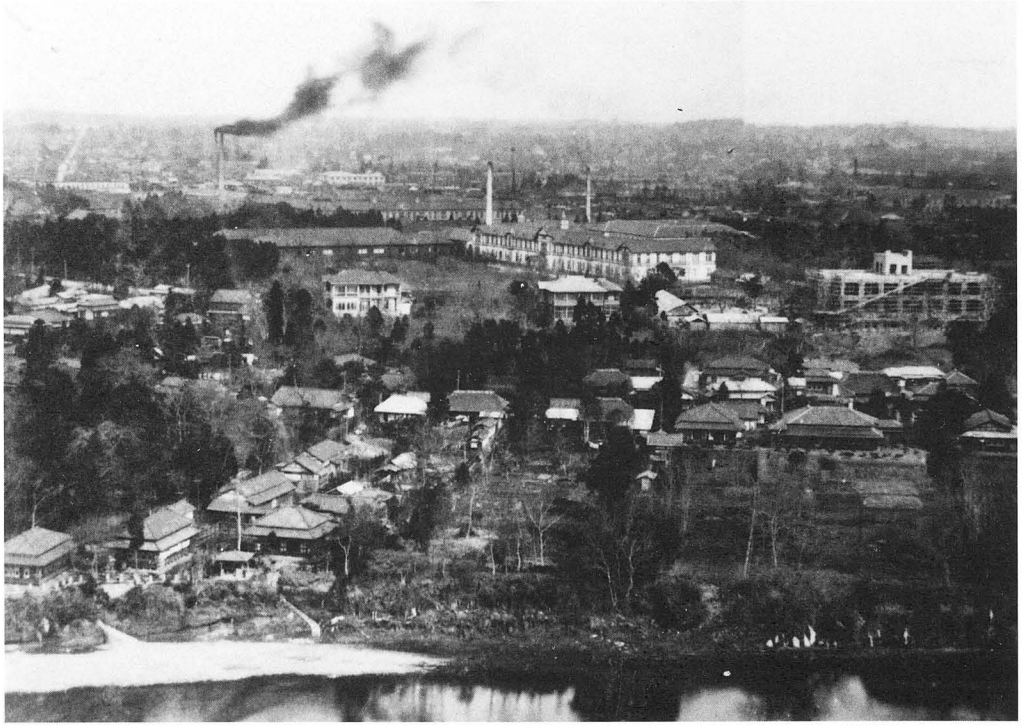
床　　下



基礎煉瓦







Ⅱ　旧仙台市長公舎解体に伴う実測調査

旧北六番丁の通りに面する南側、仙台市木町通二丁目４番54号に位置する旧仙台市長公舎は、木造二階建、屋根寄棟造瓦葺の住宅建築であった。藩政時代、仙台藩の中級武士の屋敷が並んでいた付近に建てられたこの住宅については、所有者である仙台市（財政局管財部）にも創建や沿革に関する記録資料はほとんど残されていないが、明治時代の比較的早い時期の建築と伝えられ、明治末期に仙台市が取得したようである。いつからかは不明であるが、戦前まで旧陸軍第二師団関係の宿舎として使用された後、仙台市長公舎となるに至った。

昭和59年11月、当時この建物を宿舎としていた島野武前仙台市長が急逝されるまで、住宅として実際に使用されてきたが、老朽化等のため翌昭和60年解体されることとなった。これに伴い仙台市教育委員会では、取りあえず仙台市文化財保護委員会の佐藤巧副委員長に現地視察を依頼し、同年４月17日に実施した。

その結果、佐藤巧副委員長の所見として次の点が示された。

1）表玄関、中玄関、内玄関といった構成や間取りのあり方からみれば、江戸時代末期の中流武家屋敷の様式を呈している。

2）建築年代は、明治初年の頃と思われる。

3）仙台市内に遺存する類似の建物は極めて少なく、市長公舎として使用してきたという仙台市にとっての歴史性という観点からみても貴重である。

4）保存が不可能だとすれば、正確な記録保存を行うことが望まれる。

仙台市教育委員会では、以上の所見をもとに対応策を協議した結果記録保存にとどめることとし、既に同公舎の解体工事を請け負っていた株式会社松井建設東北支店（熊谷新二支店長）に委託して、実測、図面作成、及び写真記録を実施した。以下の図版等はその委託調査によるものである。

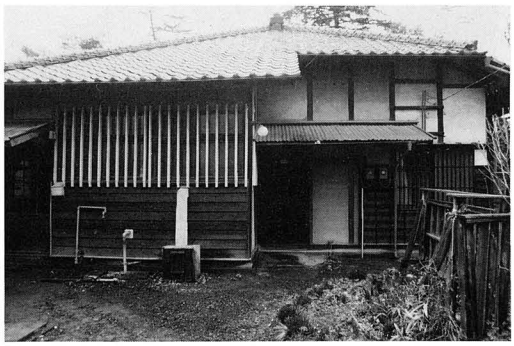
なお、旧仙台市長公舎は昭和60年５月をもって解体工事を終えたが、その過程において建築年代や修復等の経過を明らかにする新たな資料（棟札等）は発見されなかった。

全　景
（南側から）

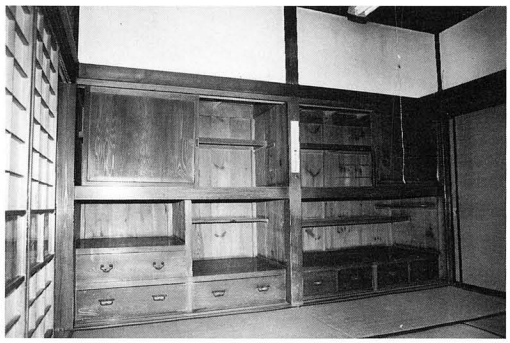
北側面（玄関）

北　側　面

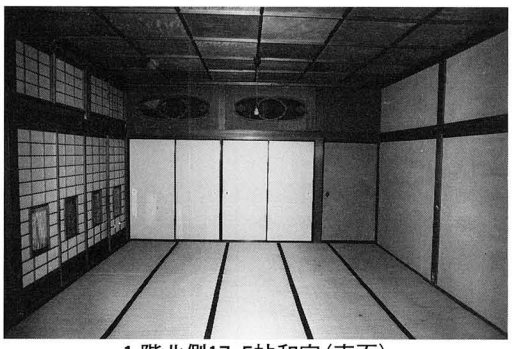
南　側　面



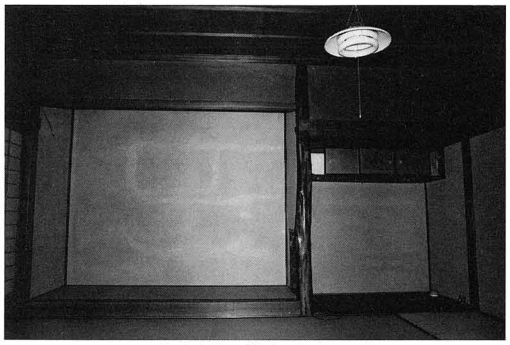
東　側　面



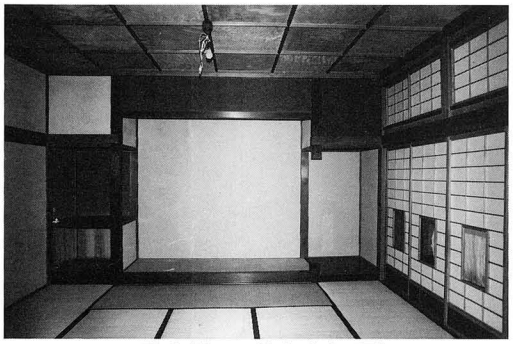
1階南側10帖和室の床の間



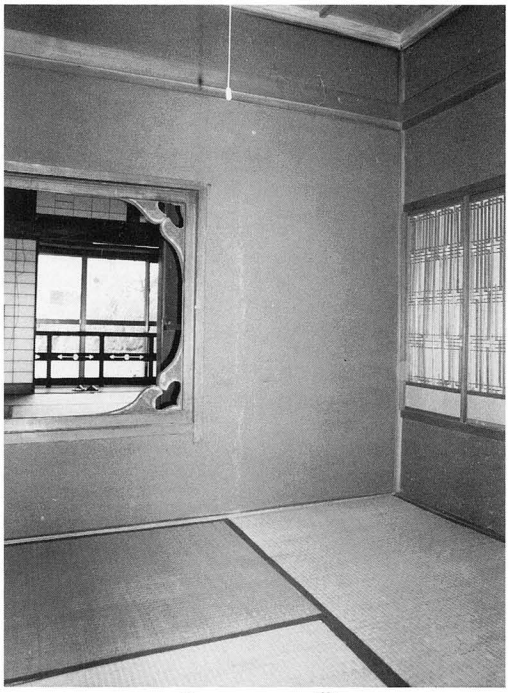
1階北側17.5帖和室(東面)



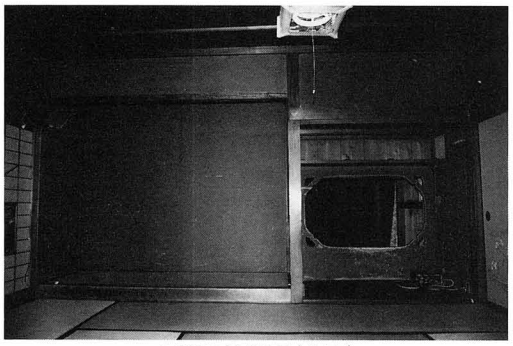
1階南側6帖和室(西面)



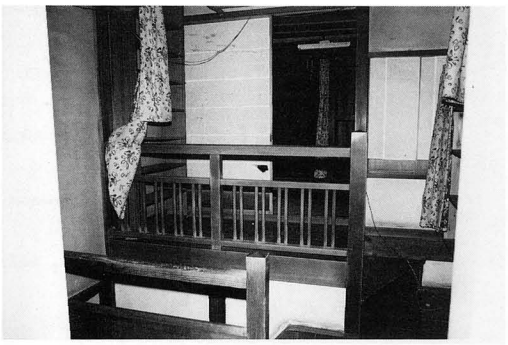
1階北側17.5帖和室(西面)



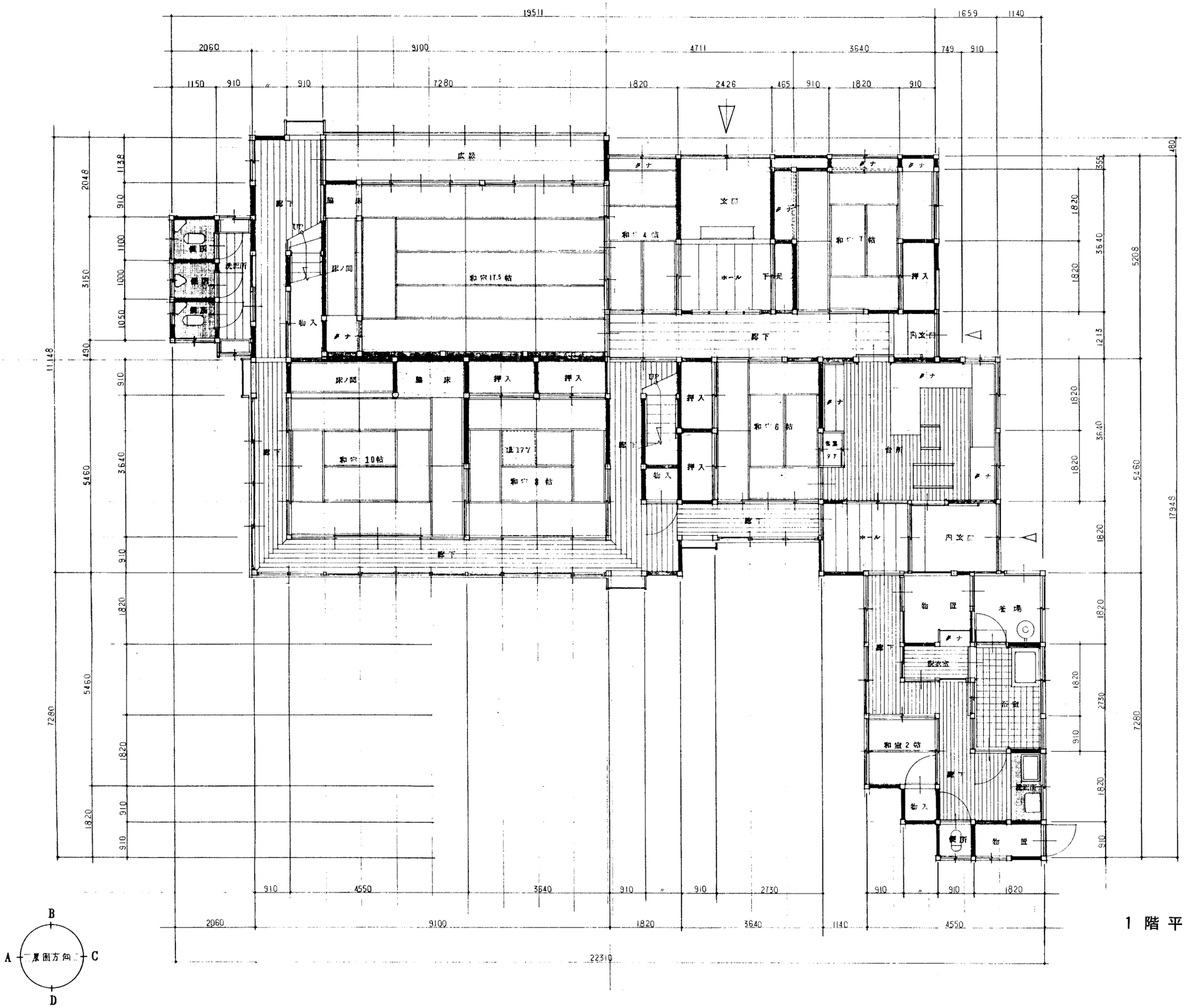
2　　階



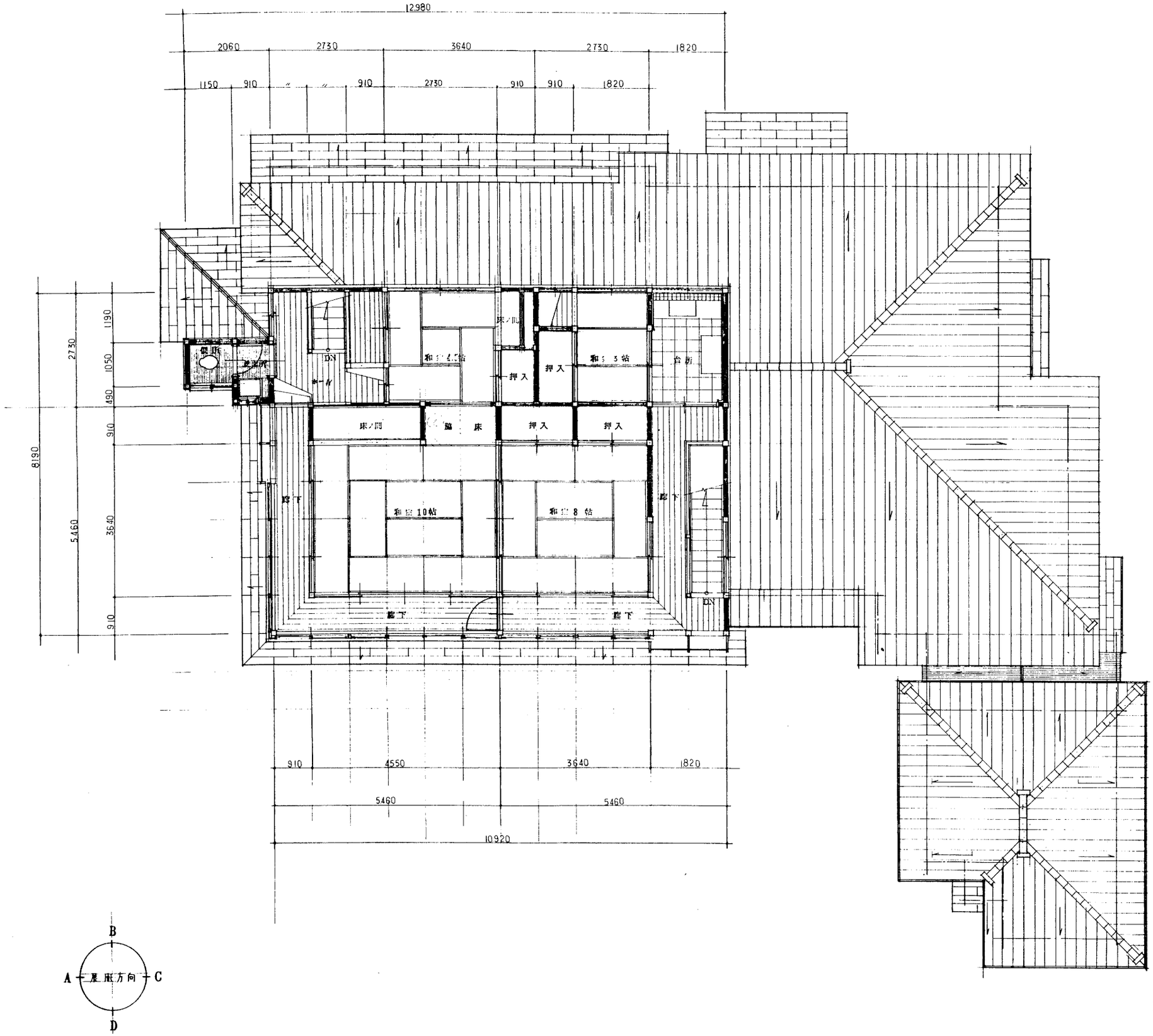
2階10帖和室(北面)



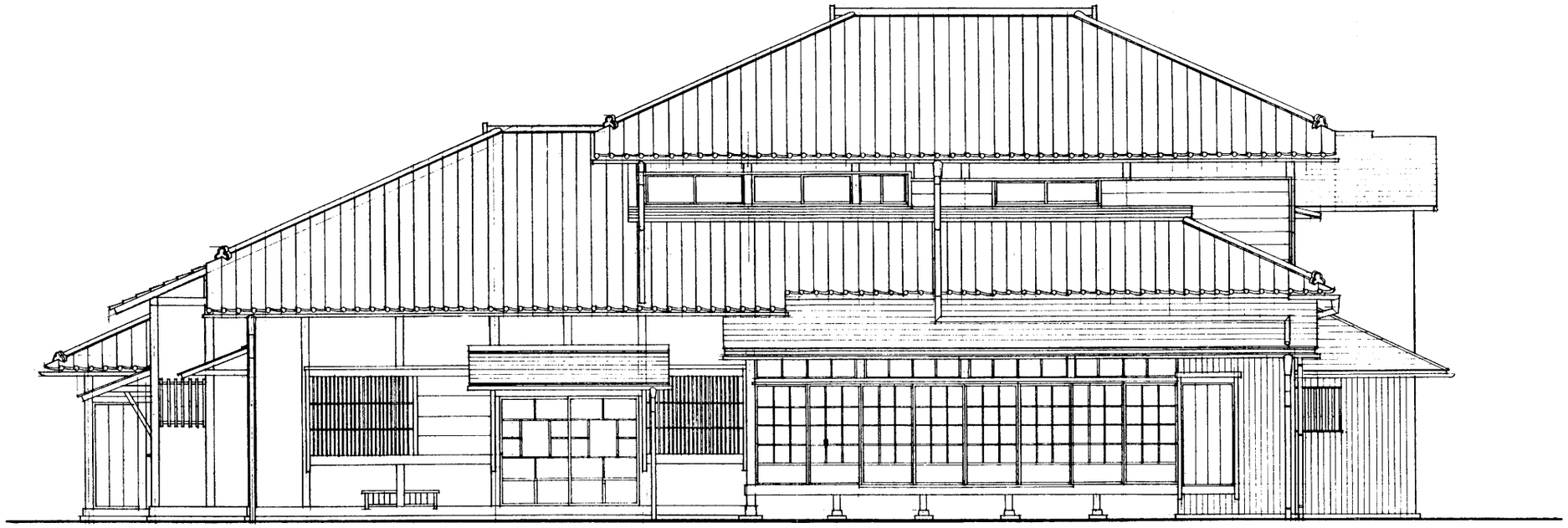
2階階段ホール(東面)


広縁
廊下
脇床
床ノ間
和室17.5帖
物入
ダナ
和室4帖
玄関
ホール
下足
和室7帖
押入
内玄関
床ノ間
脇床
押入
押入
和室10帖
床177
和室8帖
押入
押入
物入
和室6帖
食器ダナ
台所
ホール
内玄関
物置
釜場
脱衣室
浴室
和室2帖
物入
便所
物置
便所
洗面所
便所
便所
19511
1659
1140
2060
9100
4711
3640
749
910
1150
910
910
7280
1820
2426
465
910
1820
910
11148
7280
22310
2060
9100
1820
3640
1140
4550
910
4550
3640
910
910
2730
910
910
1820
B
A
C
D
展開方向

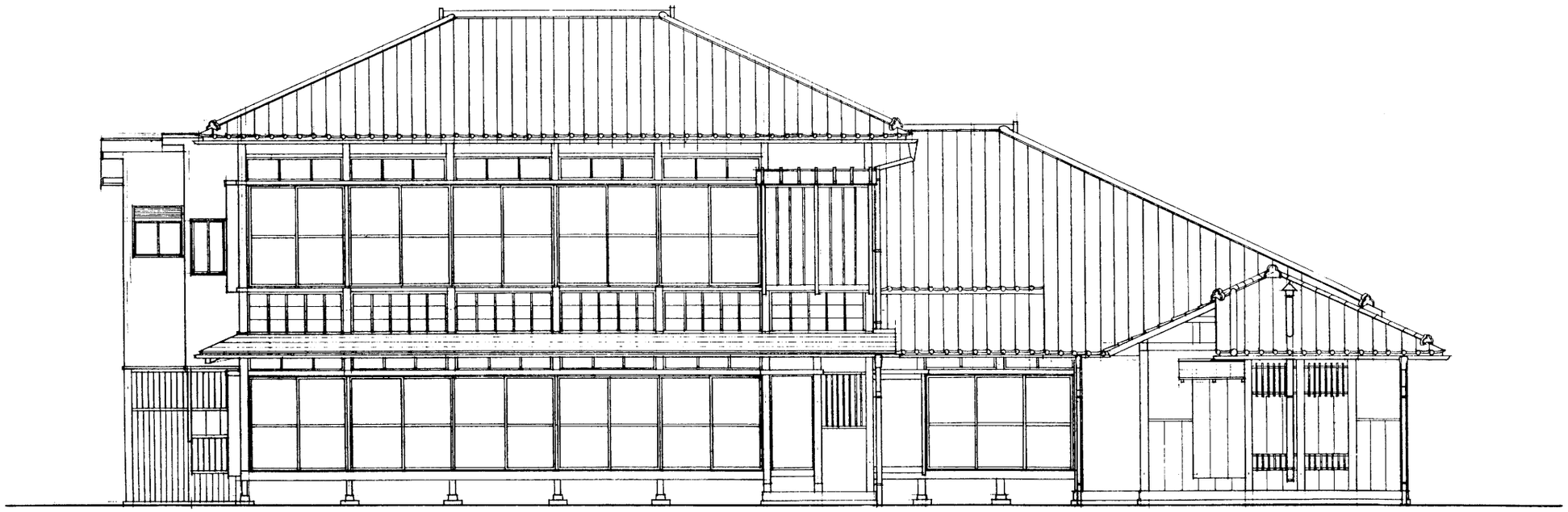
1 階平面図


12980
2060
2730
3640
2730
1820
1150
910
910
2730
910
910
1820
1190
2730
1050
490
910
8190
5460
3640
910
便所
洗面所
ホール
DN
和室12帖
床ノ間
押入
押入
和室3帖
台所
床ノ間
脇床
押入
押入
廊下
和室10帖
和室8帖
廊下
廊下
廊下
910
4550
3640
1820
5460
5460
10920
B
A
屋根方向
C
D

2 階 平 面 図

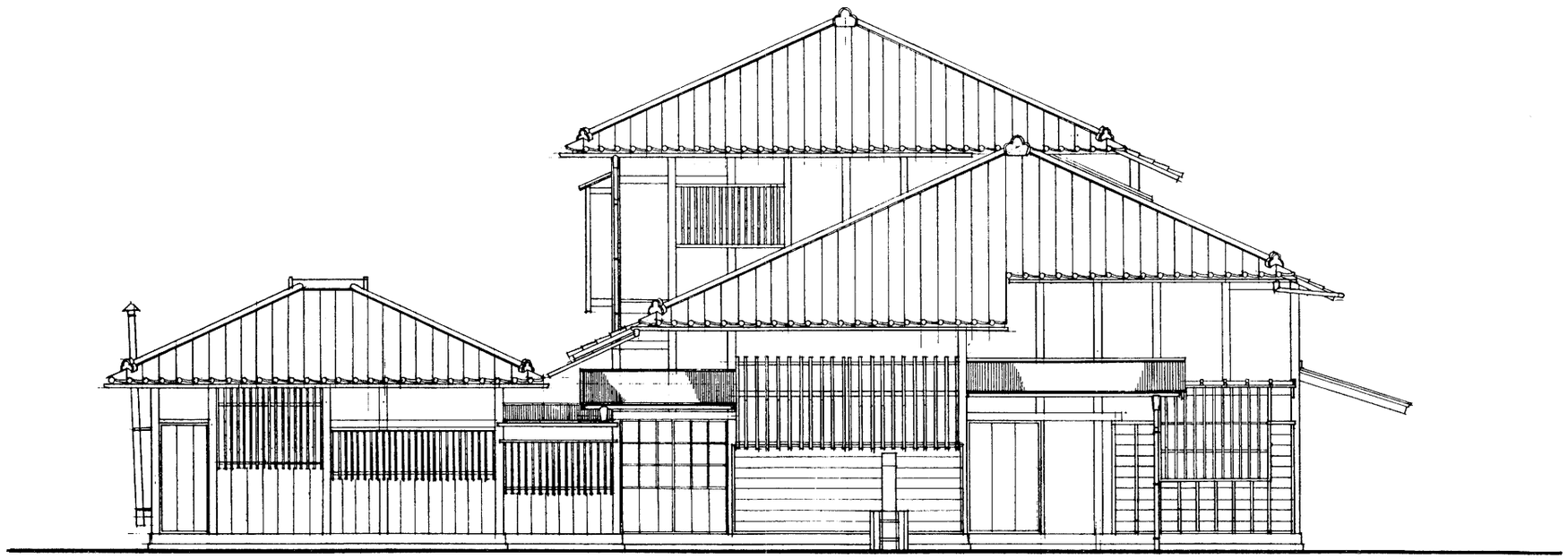


北側立面図

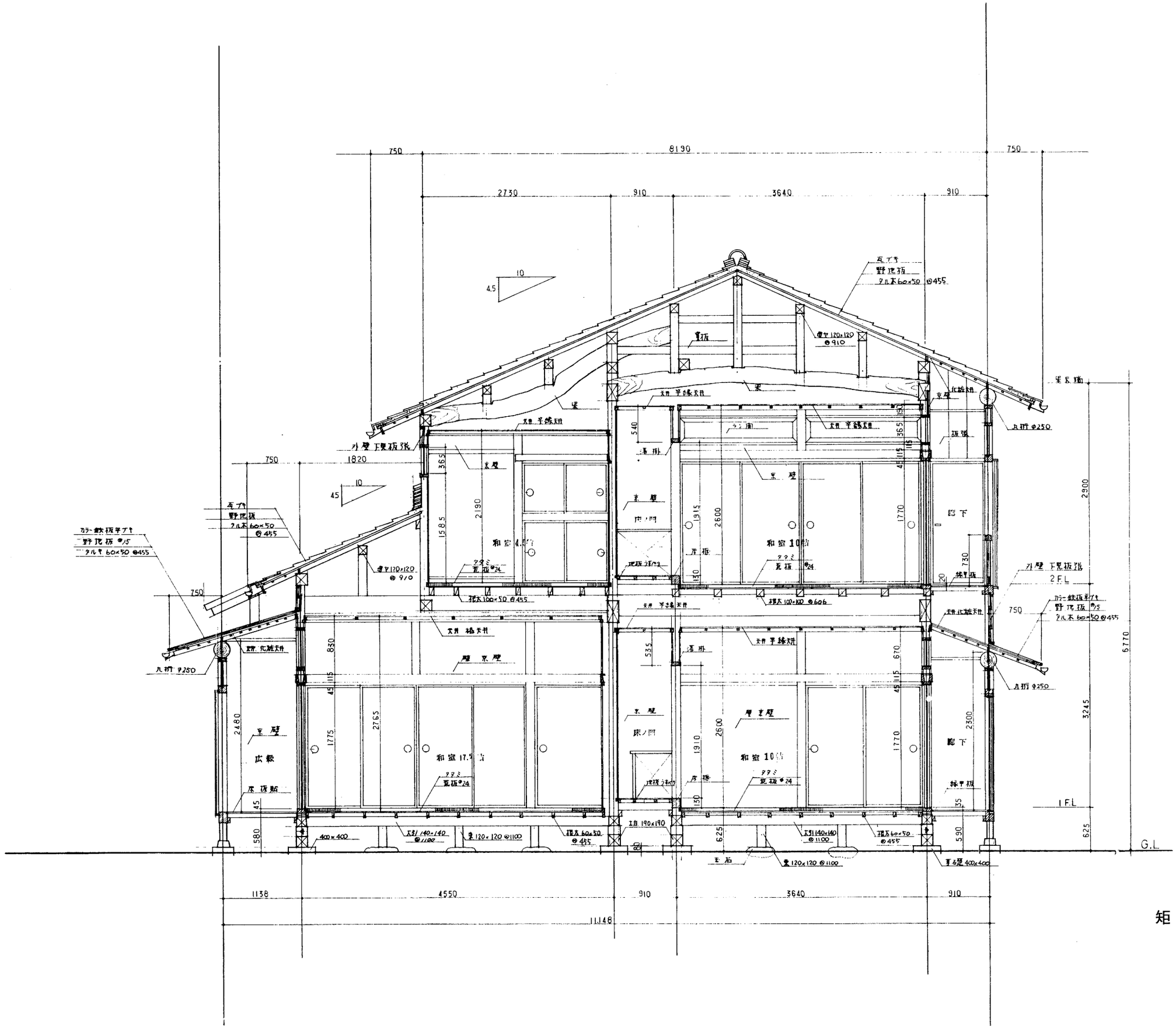


南側立面図

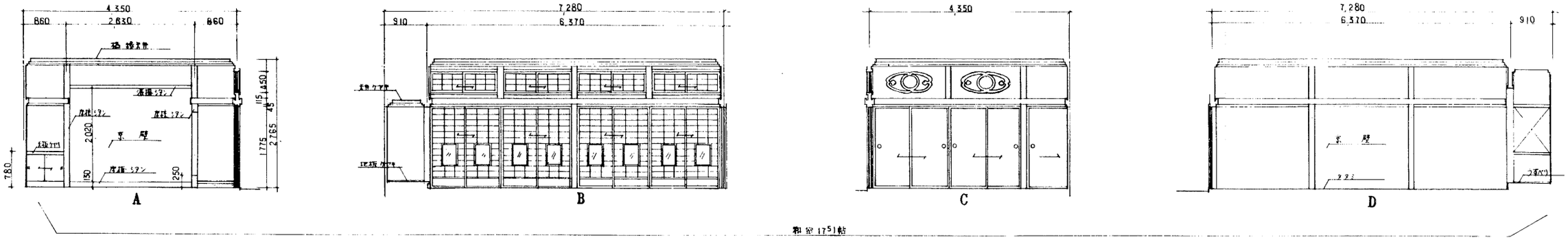
西側立面図

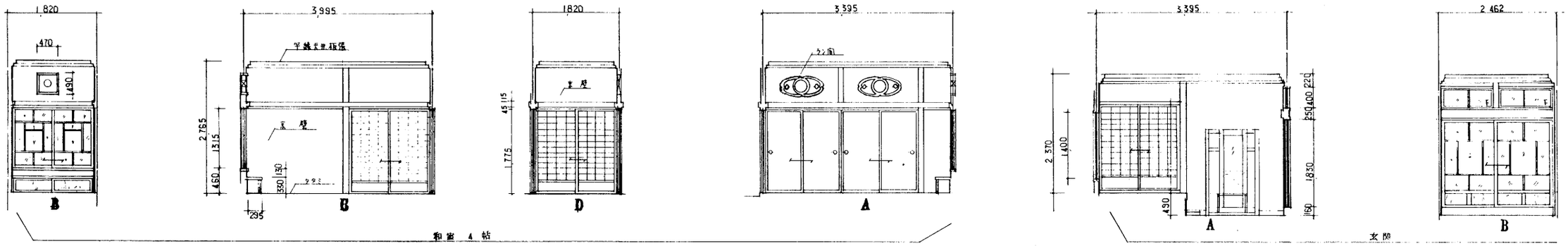


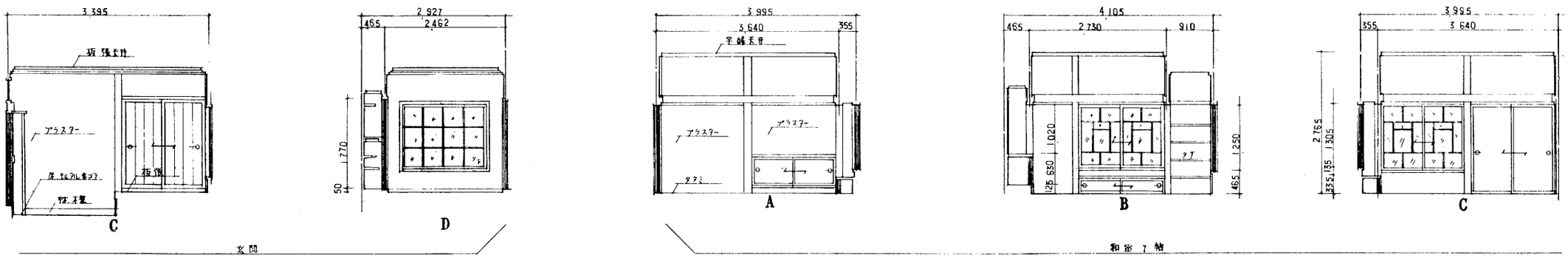
東側立面図

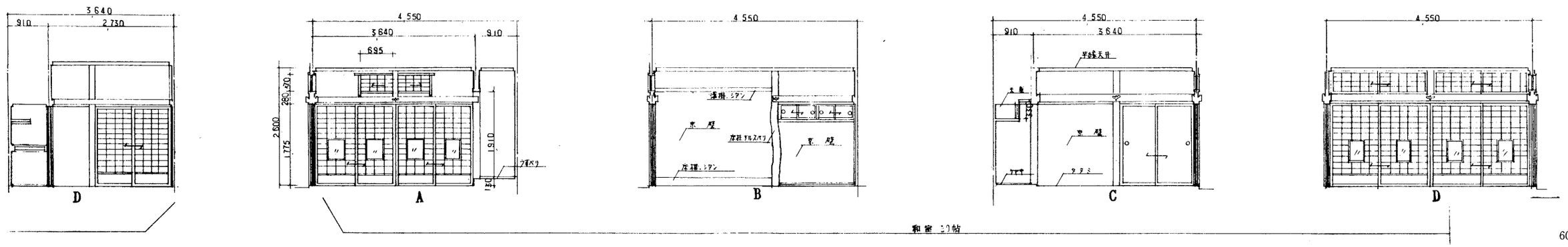

8190
2730
910
3640
750
1820
和室4.5畳
和室17.5畳
和室10畳
廊下
広縁
床の間
2FL
1FL
G.L

矩　計　図









展　開　図

仙台市文化財調査報告書第106集

仙台市文化財分布調査報告書V

――仙台市指定文化財候補物件調査――

――旧仙台市長公舎解体に伴う実測調査――

昭和62年3月

発行　仙台市教育委員会

仙台市国分町3－7－1

仙台市教育委員会社会教育課

印刷　株式会社　共新精版印刷

仙台市日の出町2－4－2

TEL 236－7181